

東海大学観光学研究

2019 第5号

レジャーブームにおける国家森林公園の持続可能な発展 —中国の長白山国家森林公園を例として—	徐海洋	1
日本庭園の景観に対する外国人観光客のデスティネーション選択性に関する研究	李佳恵	29

レジャーブームにおける国家森林公園の持続可能な発展

—中国の長白山国家森林公園を例として—

徐海洋

文学研究科観光学専攻修士課程

1. はじめに

近年、中国国内にとどまらず、国際的な生活水準の向上などに伴い、環境の悪化が懸念されている。環境問題には、二酸化炭素増加などの温室効果ガスの排出に伴う地球温暖化の問題や、海洋に漂うマイクロプラスチックの問題等、様々な種類のものがあるが、観光客の増加に伴う原生自然の保全対策問題も国際的な環境問題の一つと考えられる。中国国内においても、自然環境問題は、近年ますます注目されているようになり、自然環境を保護する意識も高まっている。そして、自然資源の持続的な活用方法の確立が求められている。

中国国内において森林旅行は、新産業の一つとして、観光業の中でかなり重要な役割を果たすようになってきていて、ますます多くの国内外の旅行者に愛されるデスティネーションとなってきた。なぜかという、森林旅行には、他の旅行とは異なり、大自然に重点を置き、日々の喧騒から距離を置き、森の緑に心を解き放つ、自然と親しむことができる、心身とともに癒されるなどの特徴があるからである。国際的にみると、特に、イギリスやアメリカ、日本などの先進諸国では、森林旅行は、かなり成熟しており、海洋や陸地の生態系が織りなす魅力的な観光資源を巡るいわゆる「生態旅行」のなかでも、ひととき重要な地位を占めている。

このような現状を背景に、近年、中国では森林観光業が著しい発展を遂げている。特に、中国で指定されている公的なレクリエーションの森である「国家森林公園」の開発と発展が、中国の各級政府の施策の中で重要視され、大きな力が投入されている。

インターネットによる報道記事によると、2014年末時点で、中国の森林観光地の数はすでに8,500か所に達しており、そのうち森林公園は3,101か所、総面積は1,780万ヘクタールに達している¹⁾。これらの森林観光地は中国の経済発展が進んでから顕在化したものが多く、現状の森林観光業の急速な発展から見ると、中国の森林観光業には、まだまだ大きな潜在力と将来性が孕んでいると考えられる。

このような森林観光業の急速な発展に伴い、改めて考えなければならないのは、森林環境を巡る「持続可能な発展」を考慮した観光の振興を図ることである。「持続可能な発展」とは、「将来の世代のニーズを満たす潜在力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たす」ことである²⁾。これまでの研究成果を概観すると、各国の持続可能な発展理論は例外なく、生態環境を調整することと、環境資源を合理的に開発するような社会を創ることに力を入れているものであると考えられる。そのため、観光的に、国家森林公園の建設と持続可能な発展の立場からみると、国家森林公園の建設と発展を考察するとき、「持続可能な発展」という考え方は、避け

て通れないきわめて重要な課題だと考えられている。なお、後述の先行研究の検討の章で詳述するが、中日両国の研究者も、国家森林公園の持続可能な発展に関する様々な研究や調査などを既に行っており、現状の問題点や解決対策などを提出してきた。それは、観光業の発展と環境の保全を両立できる社会を目指し、観光と環境を両立させるために大きな貢献をしたといえる。ただし、上述したとおり、森林などの自然景観を楽しむ観光業が中国国内では予想以上に急成長しており、各種ある観光活動の中でも主要な位置を占めるまでになった。それは、森林観光業の発展に絶好なチャンスを与えているとともに、森林観光業の中に「持続可能な発展」を考慮した仕組みを適切に取り入れることが急がれている状態にあるともいえる。

2. 研究の背景

中国では、ここ数年、森林観光業は生態旅行における重要な地位を占めており、非常に人気がある。森林観光業の発展は、森林資源を保護することができるだけでなく、森林公園の建設と開発によって、森林観光業を推進していくことは、経済的収入にもつながっており、地域発展にもつながっていると考えられる。よって、政府や投資者は、ますます森林観光業の発展や開発などを重視し、より一層森林観光を開発する意欲を強めたのである。

中国は、改革開放が実行されてから数十年が経ち、中国の森林観光業は、ゼロベースからどんどん発展しており、素早い拡張の態勢を保ってきた。そして、中国の森林観光業も発展の黄金時代を迎えてきた。したがって、全体的状況からみると、近年、中国の森林産業は、森林(木材)を伐って売ることから、森林を美しく観光させることによって、経済的収入を得る方向に変化していることがわかる。

しかし、旅行やレジャーに対する需要が強くなると同時に、一時的な金銭欲に唆され、自然環境への破壊的な開発がだんだん深刻になっていった。それに、中国の国家森林公園の開発の歴史が浅いため、旅行と自然環境の関係についての認識が十分にできていない人がまだたくさんいる。よって、森林観光業の発展は、まだ低いレベルに留まっているといえるだろう。そして、中国の国家森林公園の発展において、建設と管理資金が不足し、産業化のレベルが低く、制度や政策措置に不備があり、科学的な計画と指導が足りないなどの問題点があることがわかってきた。つまり、中国の森林観光業の発展は大きな成果を収めていると同時に、解決しなければならない問題がたくさん残されており、真剣に考慮する必要がある。

本研究において、中国の長白山国家森林公園を例として、中国の森林旅行と国家森林公園の発展における主な問題点を取り上げ、中国観光業の事情に相応しいアドバイスや解決案を明示したい。また、それを通して、急速に発展している国家森林公園の持続可能な発展について、その性格、方向性について分析し、国家森林公園の持続可能な発展そのものの在り方について考えてみたい。

中国林業ウェブサイトの最新データによると、2017年まで全国の国家森林公園の数は合計881か所ある³⁾(表1)。

表1 中国国家森林公園保有数ランキング統計

国家森林公園保有数ランキング			
ランキング	省別	国家森林公園 (箇所)	合計面積 (ヘクタール)
1	黒龍江省	66	1685260.60
2	湖南省	63	345717.65
3	山東省	49	211999.66
4	福建省	46	377396.88
5	浙江省	39	222707.32
6	湖北省	37	308200.50
7	四川省	37	659017.28
8	陝西省	35	185391.77
9	吉林省	34	375100.60
10	内モンゴル	33	982590.60

出典：下記のサイトにより共作成したものである。

<https://baike.baidu.com/item/中国国家森林公園/5734851?fromtitle=国家森林公園&fromid=8605165&fr=aladdin>

3. 先行研究の検討

以下に、森林公園の研究について、中国と日本における研究について、典型的で詳しい研究を数例選出しまとめていきたい。

3.1 中国での研究

全体的な状況に関する研究

魏長晶・李江風（2006）⁴⁾らは、「我国森林旅游業發展総述（邦訳：わが国の森林観光業の發展概要）」において、及び李東瑾・畢華（2016）⁵⁾は「中国国家森林公園旅游景区時空演變特徵及其驅動因素分析（邦訳：中国国家森林公園景觀の時空變遷の特徴およびその驅動要因の分析）」において、または秦楠（2010）⁶⁾は「国家森林公園教育旅游產品開發研究（邦訳：国家森林公園の教育觀光製品の開發に関する研究）」という論文において国家新進公園の研究が行われている。上記の三つの先行研究はいずれも中国の森林旅行業の全体的な状況についての分析であり、これらの研究内容から、中国の森林観光發展の歴史、現状、特徴及び中国の森林公園の發展における問題を把握することができる。

まず、中国は豊富な森林資源を持っており、そして、近年、人々の自然への志向も昔より強くなってきた。そのため、中国は森林観光業を發展させる基礎を持っている。一方、發展の過程において、中国国家森林公園の変遷はいくつかの段階を経て現在までたどり着き、今はちょうど水準が向上する發展という段階に当たっているといえよう。これは大変貴重なチャンスで

あると同時に、建設と管理資金の問題や規模化、産業化の不足、規制、政策の不十分といった多くの問題も無視してはならない状況に置かれていることが明らかになっていない。

本研究の研究対象である長白山森林公園は、中国の北方地域において重要な森林公園であり、これからの発展が間違いなしに期待される観光デスティネーションである。そのため、今までの中国の国家森林公園の発展ぶり、例えば発展の規律や問題、解決法などを知り、旅行製品として、従来からあった教育旅行製品のように、精神的な価値を増やし、国家森林公園としての価値を最大化するのかといった課題を解決するために、上記の先行研究は非常に参考になると思われる。

3.2 日本の研究

森林公園の機能に関する研究

吉田謙太郎・中西智紀(2010)⁷⁾は「選択実験による郷土種に配慮した森林公園整備の経済的評価」において、及び白井珠美・岩崎寛(2011)⁸⁾らは、「森林公園における市民参加型癒しの森づくり」の中で、また只木良也(2014)⁹⁾の『森林生態学の100年』において、森林公園について言及している。上記の3つの先行研究は、いずれも森林公園の機能に関する研究である。森林公園の建設は、単なる経済的な目的を果たすものではなく、人々の生活水準を高めることでもある。そして、生態破壊が深刻になりつつある現在において、森林公園の建設は、生物物種にとっても非常に重要なことである。自然の豊かな森林公園は、動物や植物にとっても素敵な家でもある。

そのため、これらの研究は、森林公園の整備において、人間だけではなく、生物のための森づくりにも視野を入れようとしたのである。そして、これらの生物のための森づくりは同時に、人間のための森づくりでもある。市民参加型癒しの森づくりに関する先行研究から見ると、「虫・小動物」「森の樹木」「鳥の声」などの癒し効果が非常に高いということがわかる。そして、森林公園の持続可能な発展を図るために、まず何よりも重要なのは、森の生態を保ち、それをますます自然が豊かな森林にすることである。只木良也の『森林生態学の100年』は、森林生態学という視点から考察を行っているため、生態系に対する諸環境の研究は本研究にとっても良い啓示になる。

したがって、これらの研究は、今後の長白山森林公園の持続可能な発展を実現するために、発展計画の設計上にとって非常に有意義だと思われる。

4. 目的・対象・方法

4.1 仮説

理論仮説：中国の国家森林公園の多くは設立されて日が浅いため、持続可能な発展を遂げるうえで、運営・管理面に課題が残されている。

操作仮説：長白山管理委員会が、長白山国家森林公園の専門的な運営管理機構として提出した課題や政策は、来訪者の魅力度を向上させ、持続可能な発展に寄与している。

4.2 目的

本研究では、レジャーブームにおける中国の長白山国家森林公園の持続可能な発展について、その現状や問題点、未来の可能性など、持続可能な発展を実現する方法について研究することを目的とする。

4.3 対象

本研究では、中国の長白山国家森林公園を対象とする。

4.4 方法

具体的な研究方法として、既存の資料や研究文献を分析した上で、実地調査を行い、その上で分析するという方法をとる。

4.5 本研究の意義

社会的意義：中国では、経済の成長につれて、観光業が急速に発展のチャンスを迎えた。特にレジャー旅行、生態旅行はだんだん中国国内の観光者の主要な旅行方式になってきている。同時に、観光客の質的成熟に従って、観光と旅行の基本的需要が満足されるだけでなく、消費者の旅行需要のレベルは絶えず向上し、旅行中でのレジャー、生態保護、心理体験などの需要水準がレベルアップしている。そのため、こうしたレジャーブームにおける国家森林公園の持続可能な発展の研究は、中国国内の観光産業の発展のためにも重要な社会的意義を持っている。

学術的意義：中国の森林観光業の急速な発展、及び大衆が行う生態旅行へのニーズから見ると、長白山国家森林公園に存在する問題の解決は、新産業としての森林観光業の発展に重要な参考事例として中国全土に普遍化が可能になるはずである。つまり、ケーススタディーを通じて森林保護と管理の関係をどうやって扱い、どのように長白山国家森林公園の持続可能な発展を図るのかについての研究は、重要な学術的意義を持っていると判断している。

5. 結果

(一) 長白山国家森林公園

長白山は中国東北地域の第一の名山であり、自然、生物、歴史と地質等においては極めて重要な価値を有している。長白山国家森林公園の自分自身のメリットを活かし、海外内にも有名な観光スポットになる素質を備えている。

長白山国家森林公園における森林観光管理のパターンの事例は、観光業が中国各地の国家森林公園の持続発展に役立つということに繋がることを証明したい。また、長白山国家森林公園の経営パターンはほかの国家森林公園の持続発展に新しい道を開き、新しい考え方を導くことができる。

本章は長白山森林公園を例として、長白山管理委員会の成立に関する経緯を明らかにしてから、長白山国家森林公園の各時期の開発について、それぞれの開発時期のことについて、現地

調査の資料と結びつけながら、考察していきたい。

5.1 長白山管理委員会

長白山管理委員会が成立に至った理由は、主に以下の背景からなっている。

第一は、行政区画の分立による管理への障害を打破するためであることである。長白山が国家森林公園として管理される前の段階において、長白山地域全体は、主に二つの市州と三つの県に跨がって別々に管理されていた。いわゆる縦割り行政のもと、管轄区ごとに別々に行政が進められていた。

第二は、長白山の実際の自然状況の複雑さへの配慮である。長白山森林公園では、原始林を主として、各種類の多様な動物や植物が存在するため、それに対する保護と管理が必要である。その過程において、かなり完備された課題を立て、仕事を順調に進める必要がある。そして、その地域環境の運営管理は極めて複雑であるだけに、もし開発が少しも不適切なところがある場合、その土地の生態系が完全に破壊されてしまうだけでなく、その後の森林公園の管理運営も観光資源の劣化のために極めて困難に陥る可能性が考えられる。

第三は体制を打破することによって、開発の効率を高めるという側面である。従来の開発パターンのままでは、行政区画の分立による管理への障害が存在するだけでなく、開発に関する方針や権限は数多くの部門によってきめられていたため、開発を図る際、数多くの審議が必要であり、同時に、必要な書類、手続きなどもあり、たとえ小さな工事の実施でも、数個の部門に報告し、あらゆる部門からの許可や審査が通ってから実行する必要があった。

だからこそ、長白山に対する計画、保護、開発かつ管理を統一するために、2005年6月に吉林省委員会及び吉林省人民政府は吉林省長白山保護管理委員会（略称：長白山管理委員会）を設立することを決定した。

2006年1月に長白山管理委員会が正式に開業し、法律に基づいて管理地域内の経済かつ社会行政事務及び自然資源に対する統一的な指導と管理を行うことになった。吉林省人民政府は長白山管理委員会を市（州）と同一視し、かつ管理する。」と明確に述べている¹⁰⁾。その後には、長白山のロゴをデザインし（図1）、長白山北景勝地の乗り換えセンター（図2）と総合楼の建設が始まり、観光地としてのVIPサービス体系が整い、長白山景勝地は、順調に国家5A級景勝地に指定された。

5.2 長白山国家森林公園の各時期の開発

5.2.1 開発時期以前の長白山

本節では、長白山管理委員会を成立する前の時期を「開発時期以前」と定義することとする。

まず、工業環境汚染が長白山観光地へ強く影響していたことについての調査結果をまとめた。近年に至るまで、中国では環境汚染を重視するという考え方が少なく、経済の発展を最優先にするという社会全体的な背景があった。そのため、長白山地区というような経済発展が遅れている地域では、なおさら工業の発展が重視され、それによる汚染問題を重視することがなかったようである。その結果として、工業の排気に含まれる汚染物質の濃度が危害レベルに達



図1 長白山のロゴ(写真左上)
(出典:長白山管理委員会により整理¹¹⁾)



図2 北景勝地の乗り換えセンターと総合楼
(出典:長白山管理委員会により整理¹¹⁾)

し、長白山地区の生態系を破壊し、大気汚染を引き起こすことに繋がった。

また、都市化の進行につれて、都市環境の汚染も長白山地区の環境に影響しはじめた。都市環境の高度な人工化、人間活動の集中は原始林を主とする当地の自然環境に対して強いインパクトを与え、都市化する過程においての人間の行動は地形、気候、水質、植生、動物などに対する不可逆的な変化を与えた。それに伴い、周辺の自然環境と生態環境に深刻な影響をもたらした。

さらに、観光客の観光による汚染も厳しかった。観光の過程において、さまざまなごみ問題が発生しているが、当時は系統的な対応策はなかった。そのため、観光的価値のある美しく生物が多様な大量の森林資源は無制限に汚染され、森林資源の再生と自然成長を深刻に破壊し、野生動物の生存環境と森林自然生態の発展循環に悪影響を与えていった。このようなことを背

景に、政府は長白山地区の環境を保護し、持続可能な開発を図るために、長白山管理委員会の成立が促されたのである。

5.2.2 長白山管理委員会が成立された初期

長白山管理委員会が成立した初期段階においては、様々な課題が見出されていた。そのため、長白山管理委員会はどのように持続可能な発展計画を制定するのかということをめぐる、具体的な方案を作るために、林業部門や、政府の司法部門との連携を図ったのである。

このようなことを背景に、「吉林省長白山開発建設（グループ）有限責任公司」（以下、「長白山開発建設グループ」と略称する）が吉林省政府の承認を得て成立された。「長白山開発建設グループ」は成立すると同時に、5つの子会社を設立した。それぞれは「吉林省長白山観光地管理有限公司」、「吉林省長白山観光交通運輸有限公司」、「吉林省長白山インフラ建設有限公司」、「吉林省長白山天池旅行社」、「吉林省長白山不動産開発有限公司」である¹²⁾。

設立以来、長白山管理委員会の指導の下で、長白山開発建設グループは「統一計画、統一保護、統一開発、統一管理」を原則として、①観光スポットの保護と管理、②重大プロジェクトの投資、③政府投資・融資のプラットフォームという3つの機能を重点として、徐々に長白山地域の経済発展を促し、現在まで支持し続けてきたのである。

このように、長白山管理委員会はグループ企業の形で、交通、観光地管理、不動産開発、インフラ建設など、管理の分野を細分化することによって、よりデリケートな管理を実行することができたのである。

5.2.3 現在の持続可能な開発時期

長白山のこれからの発展について、持続可能な開発はすでに多方面にわたって行われている。

まず、観光産業の面で、長白山国家森林公園は、すでに世界の自然保留地、国際生物圏保護区、国家級自然保護区、国家5A級観光地などの多くの榮譽を手に入れた。これは長白山国家森林公園の自然環境がよくなってきたと評価されたことに起因する。現在、長白山開発建設グループはすでに北西観光客センター、乗り換えセンター、松花江水源地総合管理、観光地5A級改造などのインフラ施設プロジェクトの実施を行い、完成している。このように、長白山はより先進的な観光地域を実現し、観光地の国際化をすることによって、持続可能な発展を遂げている。

文化の面から言うと、長白山地区の文化は歴史が長く、中国東北地方文化の代表でもある。中国は長い歴史を持つ上に面積も広大で、各地の自然文化は幅広く、各地でそれぞれ異なる文化を持っているため、長白山に観光しに来る観光客のうち、中国東北地方出身でない者も数多くいるため、東北地方の文化に対しても濃厚な興味を示している。それに、東北地方は中華民族の多元文化の重要な構成部分で、長白山観光地区の国際化に向けて、海外の観光客に対して中華文化を宣伝するという重要な役割を持っている。

そして、生態開発の面で、長白山の生態資源は非常に豊富であるため、前記のように、野生動物の種類は非常に多く、森林の被覆率も高いため、120種を超える高い経済価値を持つ植

物が存在している。長白山の高まるブランド化を進めるために中国の現代的な特色を持つ生態資源産業園区と集散地をつくり、中国北薬栽培基地を建設中である。

このように、現在、長白山森林公園は持続可能な開発時期にあり、これからの更なる発展が望まれている。

5.3 長白山国家森林公園の将来性

本節では、長白山国家森林公園の将来性について述べてみたい。

まず、長白山国家森林公園の将来性を考慮するとき、中国の国内の現状や人々のライフスタイルなどを考慮しなければならないと思われる。何故かという、観光地が持続可能な発展を遂げるためには、観光客の消費動向や国全体の発展理念と合致しなければ、不可能になるからである。

現在、中国は経済的レベルが向上すると同時に、環境問題が悪化し続けている。このようなことを背景に、中国国内の人々の旅行に対する好みも変わり続けている。例えば、昔では、上海や香港、北京など、大都会に旅行しに行く人が多い傾向にあったのに対して、田舎体験や森林旅行などはあまり人気がなかったのである。当時の景色が好きな観光者のほとんどは、上記の有名な都市的観光地にしか行っていないのがほとんどであった。

しかし、現在、都市化の進行に伴い、都会の同質化現象が一般的になってきた。したがって、近年は田舎体験や森林旅行が人気になってきたわけである。そして、このような傾向は、これからも長期的に継続すると考えられる。

このような理念の変化を背景に、長白山国家森林公園では、現在、長白山国際生態交流センター、北東アジア植物園、長白山生態修養城などの重点建設項目を現在建設中である。これからの計画の実施によって、長白山の観光モードは単純な周遊観光型の旅行形態から、長期滞在のレジャーリゾート複合型の旅行形態や、生態文化体験型の旅行形態への転換を完成していくと思われる。

さらに、長白山国家森林公園の面積は広いので、現在、公園の周辺地域では、まだ大きな開発の余地があると考えられる。現在、長白山管理委員会は長白山保護開発区周辺の町の建設を計画的に完備させ、長白山を訪れる観光客の集散地として、観光客に文化レジャー体験を提供する計画をしている。

(二) インタビュー調査

5.4 第1回目インタビュー調査の分析

調査月:2018年9月

調査時間:13:30~15:00

方法:インタビュー調査

インタビュー調査対象者:王 鉄(長白山保護開発管理委員会委員)

インタビュー調査担当者:徐海洋

場所:吉林省安図県二道白河鎮—長白山保護開発管理委員会事務所

第1回インタビュー調査では、長白山森林公園を管理する長白山保護開発管理委員会に対して細部に渡るインタビュー調査を行うことを通じて、管理委員会が発足してから時間が経つにつれて、現在の運営、管理及び持続発展が、時間の推移とともに大きな変化を生じたことを明らかにできた。

まずは、開発以前の時期とされる初期段階では、長白山森林公園の大部分は原始森林で構成されるようになること、面積が 196,465 ヘクタールと広大となること、その中で林地面積が 86%を占め、約 168,918 ヘクタールとなり、更に多くの動物・植物に恵まれて生物多様性に富んだ生態系が対象になることが決定したことが確認できた。

それを遂行し、業務の平穩を保証するためには、各区域の環境の運営管理業務が非常に複雑なので、かなり用意周到で完全な課題を設定する必要があることが当時求められたことが明らかとなった。長白山では、開発上で少しでも慎重でない行動がある場合、現地の生態環境が徹底的に破壊されるおそれがある。そのようになってからでは、森林公園の管理運営の話をしている悠長な場合ではなくなる。

以下のことから、長白山森林公園に対しては、専門的知見に基づいた開発管理業務を行うため、2006年に現地政府及び旅行部門は長白山保護開発管理委員会を設立したことが明らかにできた。インタビュー調査によって、開発初期段階において避けられない課題が存在することが分かった。即ち開発業務で非常に大きな面積の原生的生態環境が破壊される恐れがあるということである。それは人為的にある観光デスティネーションを開発する場合には、どうしても避けられないことではある。

しかし、ただ無計画にその業務を進めていくと、生態環境区域を改変し、多大な面積を拓く必要が生じてしまう。そのため、必要な範囲で開発破壊程度を最小限に抑えなければいけない。または、その開発計画を元にして、どのように新しい持続的な発展計画を制定するのかを委員会は検討する必要がある。この検討内容が、開発初期段階では最も詳細を極める重要な問題となる。開発初期の段階から長白山保護開発管理委員会が大量な情報を提供してきた（図3及び図4）。

将来に向けた運営管理と持続可能な発展企画内容に対しては、持続可能な発展の面では、旅行開発が長白山森林公園の発展戦略であることを認識して、合理的な対外関係の推進と、プロモーション等の宣伝手段で相応の効果を得る必要があると、委員会は考えていた。

以上、第1回インタビュー調査からは、「長白山管理委員会が、長白山国家森林公园の専門的な運営管理機構として提出した課題や政策は、来訪者の魅力度を向上させ、持続可能な発展に寄与している。」という操作仮説の設定は支持されるという結果を導けたと考えられた。



図3 長白山区域場所図と長白山企画指導区域の範囲表示図
(出典：インタビュー対象者からの提供)



図4 長白山各観光地のイメージ図
(出典：インタビュー対象者からの提供)

5.5 第2回インタビュー調査の分析

調査月: 2018年11月

調査時間: 13:30~15:00

方法: インタビュー調査

インタビュー調査対象者: 王 鉄(長白山保護開発管理委員会委員)

インタビュー調査担当者: 徐海洋

場所: 吉林省安図県二道白河鎮—長白山保護開発管理委員会事務所

長白山保護開発管理委員会に対して実施した第2回インタビュー調査によって、長白山保護開発管理委員会が、長白山の“運営、管理、持続可能な発展”という概念に基づき事業を実施しているという仮説の妥当性が検証され、「開発以前の時期、開発初期、現在と将来の企画時期」の3ステップについての、長白山保護開発管理委員会の動向が解釈された。長白山保護開発管理委員会は、地元の課題や環境問題、産業の発展を念頭に謹慎した課題を制定した。

開発以前の時期の早期段階では、長白山観光地の全体は市州が2つ、県が3つに跨って管理され、行政エリアの区分がはっきり明確化していたため、広大な生態エリアに対しては、縦割り行政化し、それぞれの地方政府が一体的に合致して展開するのが難しかった。

その状況は、2006年に、長白山保護開発管理委員会を設立されてからは変化し、運営管理と開発項目の権限が与えられてからは、「長白山保護開発管理委員会の詳細制定方案」という方案を策定し、「9+1パターン」を課題に据えて、それに加えて「統一企画、統一保護、統一開発、統一管理」という「4統一」政策方案を堅持し、将来発展に対する必要な準備を効率的に推進することが出来た。

開発初期の段階では、長白山においては「どの様な開発運営方案を採用するか」を、開発初期の段階の重要課題に据えて、「人為開発運営方案の破壊程度をどの様に最小限にするか」というポイントを重要位置に置いて、専門家の意見を集めた。また、開発の原則を厳守して、長白山では運営管理を行ったため、初期の建設において合理的な開発が行われたことを明らかにできた。

インタビュー調査を通していえることは、他には、長白山保護開発管理委員会が、将来に向けては「どの様に既存方案を持続可能な発展戦略に繋げていくか」という課題に変わっている事実を明確しようと考えていた。また、「長白山旅行全体企画」(図5)、「長白山保護と開発全体企画」などの諸政策を重要な参考資料にし、長白山観光地の森林、山や水などの自然資源を観光デスティネーションの看板資源として宣伝することを考えている。

そして、イメージ戦略としては、「神山、聖水、奇林」、「文化長白山」、「科学長白山」などの観光商品化を進めて名をつけ、加えて、外資の導入を続けて特色を持つ公共施設産業を推進し、高速鉄道を設置し、新規フライトを開設し、ドライブなどのレジャー・娯楽も導入することを計画した(図6及び図7)。

小括すると、第2回インタビュー調査では、長白山保護開発管理委員会は、各問題に関わることについて、さらに明確に細かく回答を行ってくれたため、長白山国家森林公园の、持続可能な管理の現実性が確認され、権威性を持っている重要情報で裏付けられたと判断する。そして、具体的な方案が実際業務に運用されていることも間違いなく、とても重要な現実性がある資料が収集できたと判断している。

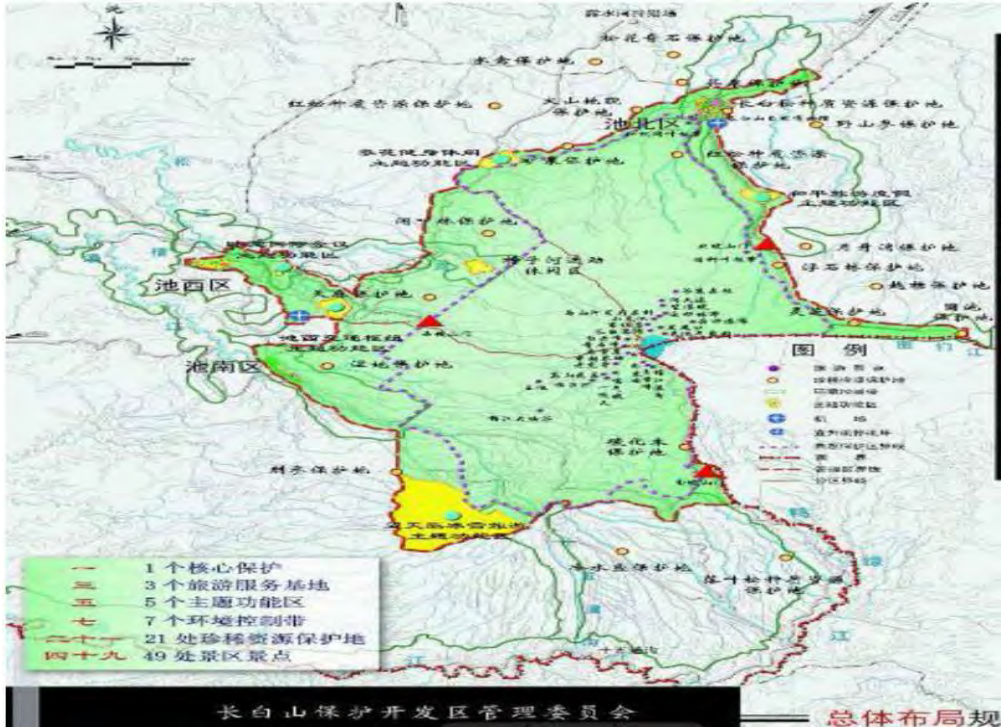


図5 長白山全体レイアウト企画図
(出典：インタビュー対象者からの提供)

京沈高铁联动大大缩短北京到长白山时间的七成

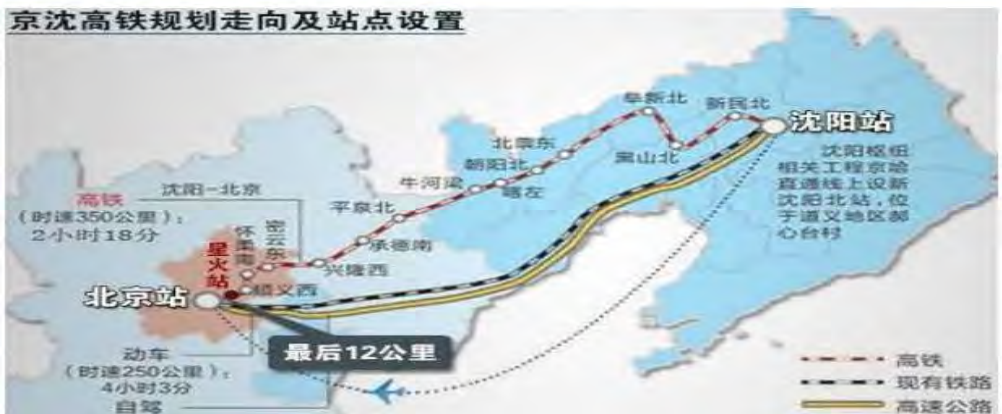


図6 「北京-瀋陽」間に高速鉄道が開通したことにより
長白山までの所要時間が70%に短縮された。
(出典：インタビュー対象者からの提供)

长白山旅游产品-驴妈妈

推荐	 <p>吉林、长白山西北双峰双卧5日跟团游 宿一晚万达度假酒店, 赠送价值148元双景点门票, 消暑避暑, 走进凉爽... 查看详情</p> <p>6月10日-30日下单, 每满500立减20元</p> <p>北京出发 火车往返</p> <p>行程路线: D1: 北京-吉林/长春 D2: 长白山魔界风景区 > 绿丰园采摘园 > 中国朝鲜族第一村... 出发日期: 06/17,06/20,06/22,06/24,06/27,06/29 更多</p>	<p>¥1984 起/人</p> <p>查看详情</p> <p>98%好评率</p>
	 <p>【开心驴行】长白山、镜泊湖、五大连池双卧8日跟团游 长进哈出, 全景连线, 返真蓝莓采摘, 赏东北二人转表演... 查看详情</p> <p>6月10日-30日下单, 每满500立减20元</p> <p>北京出发 火车往返</p> <p>行程路线: D1: 北京-吉林/长春 D2: 蓝裙帝国 > 长白山魔界风景区 > 自由活动 D3: 长白山北... 出发日期: 06/19,06/19,06/21,06/23,06/26,06/28 更多</p>	<p>¥2659 起/人</p> <p>查看详情</p> <p>100%好评率</p>
	 <p>长白山双飞5日4晚自由行 宿4晚万达喜来登度假酒店, 酒店含早餐、水乐园, 1名12岁以下儿童以上项目、赠... 查看详情</p> <p>每满500减20</p> <p>北京出发 飞机往返 豪华型酒店</p> <p>酒店名称: 长白山万达喜来登度假酒店 出发日期: 天天出发</p>	<p>¥3820 起/人</p> <p>查看详情</p> <p>100%好评率</p>

図7 长白山旅行に関する商品——驢ママ（驢媽媽：旅行網）
（出典：インタビュー対象者からの提供）

5.6 第3回目インタビュー調査結果の分析

調査月：2019年3月下旬

方法：インタビュー調査

インタビュー調査担当者：徐海洋

場所：吉林省安図県二道白河鎮——長白山保護開発管理委員会事務所

このインタビュー調査では、本修士論文で設定した検証を試みた。つまり、冬季の長白山には持続可能な発展を行うための課題があるかどうかを聞いた。そして、「年間を通じた観光を可能にする」という目標をどの様に実現するのかを巡った。

インタビュー調査によって、長白山保護開発管理委員会は、自ら持っている独特の利点を発揮させ、冰雪資源を活用し、冰雪経済を発展させ、「保護という前提の下に、長白山の発展を図るためには、冰雪経済を発展させることが最も重要な課題」であることを明確にした。

2018年に李克強総理は「两会」の政府報告において、「重点な国有観光地のチケット価格を下げ」¹³⁾、人々がより経済的な価格、より優遇的な形で質のよい旅行資源を共有させるという指示を出した。長白山保護開発管理委員会、国家政策を組み合わせ、「特惠五条」の中に規定された「毎年11月1日から4月30日まで入門券無料」などの措置を取って、観光客資源を閑散期の雪遊びに注目させ、多種多様な運営管理手段を通して、「全域旅行、全年旅行」の形を作り出すため、強い基礎を定め、科学的な持続発展可能な道に重要な一歩を踏み出したことがわかった（図8）。

長白山保護開発管理委員会は発展企画に対して、「長白山+」という冰雪戦略を実施し、冰雪や温泉資源を頼りに、長白山観光地を中心にして、周辺観光資源を絶えず開拓し、旅行施設を完璧にさせようとしている。そして運営管理では、知名度が一番高い「万達長白山国際リゾート

ト」を作り出した（図9）。

近两年淡季游客量加速增长



2018年长白山旅游人数加速增长



図8 2016-2018年の閑散期で、長白山への観光客が急増（左）
2014-2018年の長白山観光客の増長状況について（右）
（出典：インタビュー対象者からの提供）

さらに、全面的に「冰雪部落」を建設している（図10）。加えて、和平全季地形公園の裏山雪道、全国で一番長い雪圈道、初のスキー博物館、雪踏み体験センター等の基地を含む開発を企画している。

万達长白山国际度假区

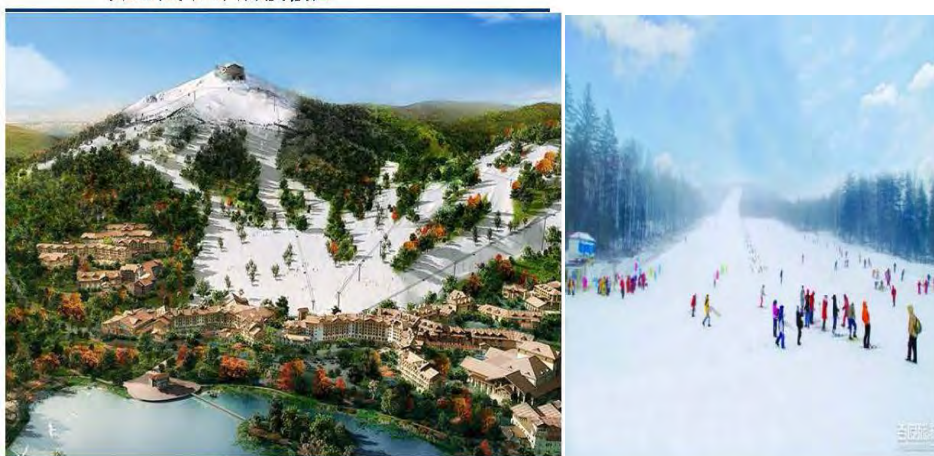


図9 万達长白山国际リゾートと万達长白山国际リゾートのスキー場
（出典：インタビュー対象者からの提供）

长白山火山温泉部落二期效果

长白山火山温泉部落二期设计效果图



図 10 长白山温泉集落のイメージ図
(出典：インタビュー対象者からの提供)

国際理念との連携では、一帯一路という政策や、他国との交通連携などのチャンスを利用し、運営管理に「一圈二帯一環」という空間配置を確定した。

また、オリンピック・パラリンピックとの産業チェーンでは、北京 2022 年冬季オリンピック・パラリンピック開催、また、2021 年の国際児童冬季競技会の開催手続きに積極的に申し込んでいる、そして 2025 年の国際青年冬季オリンピック会開催の申し込み手続きを計画している。

加えて、国際冰雪カーニバル活動、世界高山フリースタイルスキー選手会、长白山万人雪まつりなどの多様な形式で、长白山の冬季デスティネーションイメージを高め、さらに「雪神様祭り、天池観光、スキー体験、雪彫刻鑑賞、小町観光、温泉体験、美食体験、春節体験」などの全域的な冰雪旅行商品を作り出し、冰雪旅行ツアーを起爆させることを企てている。

第 3 回のインタビュー調査では、长白山保護管理委員会は引き続き持続発展可能な運営管理課題を巡って質問し、閑散期に冰雪旅行能力アップに面する問題について、詳しく明確な回答を頂いた。運営管理理念も事実に基づいて適切に遂行されていて、権威性、信頼性を基づいた現実的な重要性を持っている。

(三) 現地巡検調査

現場巡検時間:2019 年 4 月

2019 年 4 月 28 日は、この時期に修士論文の最終稿を完成させるため、长白山において実施されている「大衆特惠政策」の現実の状況を実体験するための現地巡検を行ってみた。

以下に具体的に巡検の行動を記録していく。

(6時30分、長白山北景観光区の乗換えセンター) スタッフ達は既に職場に揃っていることが確認できた。また、環境対策を行った観光バスが並んでいる状況も確認できた。これらのバスは、車検が行われ、綺麗に拭かれているなど、観光におけるリスク排除や快適性の確保などのことが行われていた。そして、改札口のロビーでは名札を付けたスタッフ達があちに行ったりこちに行ったりして、準備に忙しい様子を見かけた。観光客に快適で安全な環境を提供するため、自らの職場で真面目に対応している状況が確認できた。その後、7時までには、バスに乗って各観光区へ向かう第一陣の観光客が改札口の外に集まっていた(図11)。

(7時頃、改札口にて) ここで働いているボランティア達は、自動車旅行の観光客に対し、旅行の注意事項を説明するとともに、大衆特惠五条の関連政策を解説していた(図12)。そして、「旅行監督者」という名札をつけている特殊な「スタッフ」がいた、彼は北観光区旅行のサービス品質を監督する劉さんであった。

ちょっとした空き時間に、劉さんにインタビューをすることができた。劉さんは、「私は集散センターから採用された品質監督者の一員だ。毎日、観光客のため、より良い便利さ、より早く対応できるサービスを確保するため、休憩時間を利用して、乗換えセンターのサービス品質



図11 長白山山門
(出典：筆者撮影)



図 12 長白山山門と長白山天池主峰の観光車に乗る
(出典：筆者撮影)

問題に対して、集散センターとコミュニケーションを行い、課題が解決できるような協力を行っている」と返答してくれた。

北景観光区のスタッフからの紹介によって分かったのであるが、乗換えセンター設立の目的は北景観光区の山門という機能（役割）をここへ移設することにあった。この移設も今年行われた改革措置の一つであるとのことである。

また、ネットあるいは携帯電話のアプリを利用して入場券を買うシステムは、予約時間にあわせて、送迎バスに乗り、山登りなどを選べることに加え、入場券を買う時の混雑現象を防止できるとのことである。そして、乗り換えセンターで統一的な環境対策観光バスを利用することにより、駐車場問題やや待ち時間が長いという難題を解決できた以外にも、交通上の環境への圧力も低減させることができた。

(8 時、乗り換え場にて) この乗り換え場は北景観光区へ行く途中の道であり、空港と高速道路の出口に一番近い乗り換え場である。そのため、ほとんどの自動車旅行者はここに集まってきているといえる。筆者はここでも北京からやってきた観光者に「大衆特惠五条」についての話題を話してみた。そうすると、北京からの観光者が、この政策の具体的な内容の主な部分を覚えていたことを確認できた。その観光者は「私たち全員はその政策の魅力でここに引っ張られてきたのよ。1 枚の入場券で 3 日間に 2 つの観光区を入れるから、明日は西景観光区へ行く予定だ」との話を、隠すことなく言ってくれた。

(9 時 30 分、天池主峰のバス待合室にて (図 13))

筆者はゴミを拾っている管理員の孫さんに聞いてみたところ、「観光客に綺麗な快適な観光的雰囲気を作るため、ゴミを発見してから、8 分以内に綺麗に掃除しなければいけないとの要求があるから、先頭スタッフとして、自分でも対応すべきだ」とのことであったため 8 分間清潔保持制度などが浸透していることが分かった。

(10 時 10 分、天池主峰駐車場にて (図 14))

「旅行のラッシュアワー期間内、観光客の安全とスムーズな秩序を保証するため、スタッフ達は順序を維持するよう案内している、A エリアの観光台は制限荷重があるため、今は、一時に 150 名の定員で制限されている。天池主峰のスタッフは 46 名、観光客の安全を確保するため、誰でも自らの職場で力を尽くして働いている」とのことばを、北景観光区主峰の管理部スタッフから観光客達に自信満々で告げられた。

(10 時 45 分、天池観光台の上にて (図 15))

山東からやってきた観光者と自己紹介を通して知り合うことができた。山東省青島市公安局

の段という苗字の警察官であった。彼に聞いてみると、「私は警察だ。大衆特惠五条による警察向けの無料特惠政策が自分でも実感できた。また、家族全員でグリーン通路や親切なサービス待遇を享受できた、長白山保護開発区管理委員会より我々の様な人民警察に提供された優れた待遇に感謝する。ここで気分が気軽になったことで、地元で今より上手にきちんと仕事ができるよう、ものすごく大きな動機を与えてくれた」との話をしてくれた。横で子どもを抱いていた妻も「長白山観光区による警察向けの特惠サービスが実感され、警察の家族としての私は非常に光栄だと思っている」とのことだった。

(13時10分、天池周辺の現地巡検を終え、天池主峰の駐車場に戻ったところで)

音楽を流しながら、観光地の運転士達が組ごとに健康体操を踊っている様子を意外にも見かけることができた。体操が終わった運転士達は、スイカを食べながら、同僚の体操の様子を評価していた。この運営一部支配者である劉さんから「旅行ラッシュアワー期間には、運転士の業務ストレスが非常に大きく、運行上の安全を確保するため、体力や精神を早く回復できるように、午前中にジュースを飲ませ、午後にスイカを食べさせ、健康体操の活動をやらせることを工夫している」との話を頂いた。



図13 長白山主峰待合エリアと長白山天池主峰への乗り待合エリア
(出典：筆者撮影)



図14 長白山主峰までに到着と長白山天池主峰の観光図と天池主峰の観光路線図
(出典：筆者撮影)

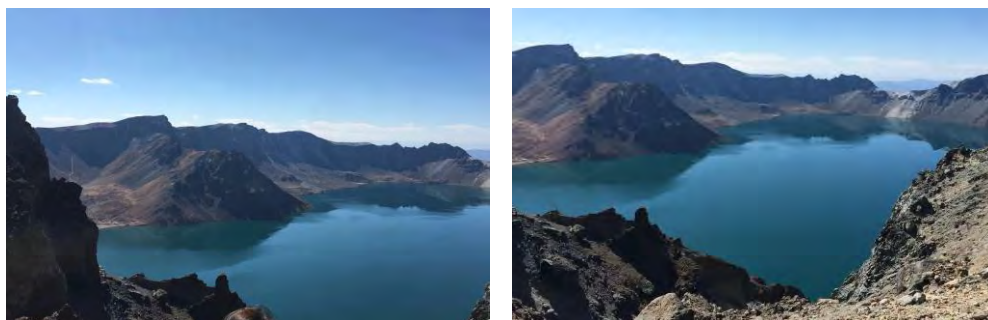


図 15 長白山天池
(出典：筆者撮影)

(13 時 45 分、温泉広場にて)

内モンゴルからやってきた恋人達に、長白山に対して全体イメージはいかがでしょうかと聞いてみた。そして張さんという名から「直観的なイメージで言えば、開発しすぎたという感じがなかった。観光地の管理がしっかりしているだけではなく、自然環境維持にも上手く対応している、ここは原生生態のまま残された自然的な観光的景色がとても多かった」と話をしてくれた。

(14 時 30 分、長白大瀑布から戻ってきたところにて)

中国在住のアメリカ人の観光客に話を聞いてみた。中国で英語を教えている裴さん（中国語の名前）は、「第 1 回目の長白山来訪である。この景色はとても美しく、天気も涼しい。自然の景色もとても気に入った。昨日、西景観光区の天池風景を見てきた。今日はこの入場券で北景観光区に入った。中国で滞在している外国人の私にも、新規政策の特恵が実感された…（中略）…紅葉の風景もとても綺麗だと思うので、秋も再び来ることを望んでいる。」と喜んで話をしてくれた。

また、「旅行前に、天気予報を事前に確認して、晴れる日だと思うなら、すぐに予約注文を行ってください、そうしないと、入場券を手に入れないよ」との経験上の旅行戦略も親切に教えてくれた。

(15 時、北景観光地山門の出口にて)

北側観光地山門管理部の宮さんに「今日は 5 月の観光シーズン直前、来客数がちょっと少ない時期の 1 日目である。長白山辺防支隊、長白山森林警察支隊、長白山観光地警察の力を合わせ、各観光地の治安管理や制御を行ってみた。各観光地からフィードバックされた状況の統計データから見ると、上下から繋がる連絡方式で秩序があるように観光することを保証しながら、事故がゼロ、クレームがゼロを確実にできた。」とのことを教えてくれた。

(15時30分、山門の外側にて)

ある観光バス修理場で、環境対策バスを呼び込んで検収を行っている様子を見かけた。そこで、修理士の常さんに聞いてみたところ「運転士はこの車が少し不安定ではないかと報告してきた。車体をチェックしたところ、車輪間の間隔に問題があったことが分かったので、そこから不安定になってしまったことが分かった。約2時間で修理を行って、正常な運行状態になるよう元に戻すことができた。」「先頭に立つ運転士の運行にプラスして、後ろ側の支援者達の業務が緊密につながっていくことができたため、今は安全で、親切で、快適な観光雰囲気を作り出すことができています」との話をしてくれた。

5.7 現地巡検を巡る操作仮説に関する分析

5.7.1 現地巡検の結果から操作仮説への検証

現地巡検では、まず、長白山北側観光区の乗換えセンターが快適なサービスを提供することが分かった。そして、「旅行監督者」が観光区旅行サービス品質を監督し、集散センターでのクレーム解決に協力していることもわかった。民衆向け五条の措置五は、「クレーム対応を完備させ、信用基金を設立して先行賠償制度を実行する」ことであり、現地巡検の実際的な状況から見ると、民衆向け五条は有力に実行されていることがよくわかる。

また、観光者が「大衆特惠五条」に対する評価から見て、民衆向け五条のうち、措置一「毎年11月1日から翌年の4月30日までの半年間無料入園でき、氷雪の季節を楽しませる」とことと「措置二：1枚の入場券で3日間観光できる。」という政策の魅力で観光客が引っ張られてきたことがよくわかった。今回の現地巡検の結果から、操作仮説が正しいことが判断できる。

5.7.2 新規政策と公式データに基づく操作仮説への検証

本研究において、操作仮説と立て、大衆特惠五条の関連政策の役割を考察した。そして、長白山国家森林公園の観光客数について、下記のデータが公表されている。

長白山保護開発管理委員会ウェブサイトの最新データによる11)と、2019年1月に、長白山観光地では79,054名の観光客を接待し、2018年1月の70,564名より同比8,904名増加し、同比12.03%増となった。

2019年4月に、44,180名の観光客を接待し、2018年4月の42,029名より同比2,151名増加し、同比5.12%増となった。

このデータから見て、長白山での冬季における観光客数は大幅に増加していることが分かり、大衆特惠五条という政策は、観光客の誘致に成功していることが立証されたと判断できる。

5.7.3 操作仮説成立の検証

今回の現地巡検を通して、民衆向け五条は、長白山国家森林公園の持続可能な発展に役に立てたのかについて確認した。そして、現地巡検の結果から見て、操作仮説の内容が検証されたとと思われる。

まず、現地巡検を通して、大衆特惠五条の関連政策が現地で力強く宣伝されていることが分

かり、同時に、当地の経営者に尋ねた結果、現在観光客数が多くなり、以前閉店された店でも現在は客の出入りが多くなったことが証明された。

さらに、上記のように、観光客への聞き取りからも、「大衆特惠五条」に対する認知度が確認され、半年間無料入園ができることや1枚の入場券で3日間観光できるといった大衆特惠政策は、観光客誘致の有力な手段だと思われる。そして、クレーム対応によるサービスの向上の努力も確認された。このように、操作仮説の正確性が証明され、政府による政策支持が今後の持続発展に有利で働くことが証明された。

5.7.4 操作仮説成立と今後の公園の持続可能な発展の見込み

今回の現地巡検の結果から見ると、特惠政策の実施によって観光しに来ている観光客の存在がわかった。今回の現地巡検での筆者の聞き取り調査は規模的なデータ支持を持っていないが、そのほかにも、この理由で観光地に訪問する人が少なくないことが予測される。この点から見ると、操作仮説に言及した「大衆特惠五条」はすでに効果を上げていることがよくわかる。さらに、サービスの面でもクレーム対策が進められていることが分かり、「大衆特惠五条」には、グリーン通路サービス、開放時間を延長する政策なども実施されているため、サービスや評価が重視される現在において、これはこれからの公園の持続可能性にもつながっていると認められ、今後のさらなる発展が予測できる。

6. 本論文の理論仮説と操作仮説に対する考察

本研究では、長白山国家森林公園の持続可能な発展に対して様々な面から考察を行った。

以下ではこれらの研究内容を踏まえ、各開発段階における課題と本研究の理論仮説との関連性や実施している政策及び現場調査による結果と操作仮説との関連性について分析していきたい。

本研究の理論仮説は下記のとおりである。「中国の国家森林公園の多くは設立されて日が浅いため、持続可能な発展を遂げるうえで、運営・管理面に課題が残されている。」

以下にはまず、長白山国家森林公園の各時期の開発から、理論仮説は立証されるかについて考察する。「第4章 開発以前の時期の長白山」で述べたように、長白山地区に、管理委員会を成立する前にも、かなりの観光客があり、主として地元の住民が自主的に観光サービスを提供していたため、管理が行き届きなところや観光客が騙されたりする現象、さらに、動物に対する不法狩猟、工業環境汚染、農業環境汚染も開発以前の時期の長白山地区にマイナスの影響を与えていた。また、観光客の観光による破壊や汚染も厳しかったなど、自然環境の破壊も深刻であった。

このように、長白山国家森林公園が成立する前に、この地域においては、すでに多種多様な問題が起こっていた。そして環境汚染問題は一時的な汚染ではなく、長い間にわたって積み重ねられていくものであるため、その汚染を解決することはたやすい問題ではない。森林環境が破壊されてから元通りに戻るまでにより長い時間がかかり、様々な面での回復のための努力が必要になる。環境汚染や森林破壊については、例えば不法投棄されているゴミの回収はもちろん

ん、土壌の性質を元どおりに戻すための研究や、動物に与える影響の調査、不法狩猟等に対する対策法の確立等についても様々な面から専門的かつ科学的な考慮をする必要がある。

このように、当時の長白山観光業は、持続可能な発展どころか、当地の森林資源を削り、犠牲にしながら物質的利益を金銭的利益に換えて富を手に入れていたといわざるを得ない。そのため、本研究の理論仮説で言及したような持続可能な発展を実現させるためには、これらの課題が解決されなければ、森林公園としての経営がうまくいくはずがない。何故かと言うと、優れた生態環境を整えることができたらこそ、人気を呼ぶ観光デスティネーションとしての基盤が備えられるわけである。この面から見ると、長白山国家森林公園の持続可能な発展を遂げるには、当時さまざまな課題があったことが本研究で立証できた。

そして、開発の初期において、観光開発によって観光客数が増加し、経済効果が非常に大きくなっていったが、同時に、管理の不行き届き、園内の建設計画の不完全性、司法管理の執行が緩いこと、経済効果を過度に重視することなどの問題も見られ、既存の問題の解決に迫られるだけでなく、それらに加えて新たな大規模な開発による資源の破壊、環境の悪化、生態の不均衡、物種の絶滅危機などの問題も浮上した。これらの問題を長白山の観光開発を実際に行う過程の中で解決するために、長白山国家森林公園は様々な面で努力を行った。

そして、現在はすでに世界の自然保留地、国家 5A 級観光地などの多くの榮譽を得るまでの状況に至ることができた。これは持続可能な発展を遂げるための第一歩だと考えられる。生態的自然環境の破壊という課題を解決することで、長白山国家森林公園は自然環境が優れている森林観光地としての地位を固めたと考えられる。これは、持続可能な発展を遂げるための基本中の基本だと言っても過言ではない。この角度から見ると、本研究の理論仮説は本調査の中では支持されると判断した。

また、長白山開発初期の段階で、「人為開発運営方案の破壊程度をどの様に最小限にするか」という課題を重要位置に置いた。観光地の合理的な設計も持続可能な発展を遂げるための課題の一つである。サービスもますます重視される中、豊かな自然環境を持つだけでは、観光客の厳しい獲得競争の中で生き残ることはできない。

そのため、長白山開発建設グループは開発の初期において、北西観光客センター、観光地 5A 級改造などのインフラ施設プロジェクトの実施を完成させ、先進的な観光地域を実現し、観光地の国際化を通して持続可能な発展を遂げていった。この点から、サービスの改良や合理的な開発計画が、持続可能な発展を支えたということが明らかにされ、理論仮説が支持されることが分かる。

さらに、これからの長白山国家森林公園の将来性について考察するとき、長白山管理委員会が将来に向けては「どの様に既存方案を持続可能な発展戦略に繋げていくか」という課題に変わっている事実を明確した。理論仮説のように、持続可能な発展を遂げるためにいろいろな課題が存在することも言うまでもない。

何故かと言うと、長白山国家森林公園の将来性を考慮するとき、国情や現在のトレンドや流行などを考慮しなければならない。そうでなければ、時代の流れに遅れ、存続ができなくなる。経済的レベルが向上すると同時に環境が悪化する背景下、近年中国国内でも人々がリラックス

を求め、健康重視の意識も強くなった。したがって、田舎体験や森林旅行が人気になってきた。このような傾向はこれからも長期的に継続すると予想できるため、これからのことを念頭に置いた持続可能な発展が重要で、この方向に沿って、課題を解決していかなければならないだろうと考えられる。

また、前述のように、季節的問題（シーズナリティ）によって、冬季のオフシーズンが長く、持続可能な発展の道筋に大きく障害をもたらしていたことも、長白山国家森林公園が抱えていた課題であった。長白山保護管理委員会は「保護という前提の元に発展を図るためには、長白山の冰雪経済を発展させる過程が最も重要な課題」であるという考えを提出した。

一方、本稿は、冬季のオフシーズンといった課題の解決をめぐり、現場巡検と言う形で観光客が長白山国家森林公園に対する印象や国の政策支持に関する理解度などについて調査を行った。その結果から、「長白山管理委員会が、長白山国家森林公園の専門的な運営管理機構として提出した課題や政策は、来訪者の魅力度を向上させ、持続可能な発展に寄与している。」というような操作仮説が支持できる実態を明らかにすることができた。

冬における旅行者の数は現状でも一見少ないが、冬に入って観光業が休業する過去に比べれば、これは大幅な前進である。すなわち、政府の政策支持によって、閑散期においても旅行者を惹きつけることができた。これは操作仮説のような成功であるかどうかは判断しにくいですが、操作仮説に言及した政策の効果であることは確かである。そして、民衆向け特惠政策を狙った内容は、操作仮説を支持する方向で、政策宣伝の効果を裏付けていると考えられた。

それに、特惠政策の実施によって、政府の政策支持は、ある程度長白山国家森林公園の持続可能性を支えたという操作仮説を支持していると思われる。

このように、現場巡検の結果を得られたこれらの事実は、将来の公園の持続可能性にも大きな影響を与えらると思われる。民衆向け五条は、閑散期において旅行者を惹きつける効果が見られ、長白山国家森林公園の持続可能な発展に役に立つという操作仮説に即している。そして、このような政策は、これからも実施されていくため、閑散期における旅行者の惹きつけはますます効果を上げ、操作仮説が支持された際にもたらされるであろう成功が、いずれかのうちに実現できると予想できる。

7. 本論文仮説に対応した結論

本論文では、中国の長白山国家森林公園を例として、レジャーブームにおける国家森林公園の持続可能な発展について分析を行ってみた。

本研究では、「中国の国家森林公園の多くは設立されて日が浅いため、持続可能な発展を遂げるうえで、運営・管理面に課題が残されている。」という理論仮説を立てた。そして、実際の考察によって、長白山国家森林公園は近年国家公園になって、理論仮説に言及した運営管理の課題が存在しているが、徐々に進められていることが分かった。その具体的な様子について、本研究では、長白山保護管理委員会の成立経緯と長白山国家森林公園の開発の方針などについて研究した。研究によって、長白山保護管理委員会を成立したのは、次のような管理面における課題を解決するためのものだということが明らかとなった。

2006年に、長白山保護開発管理委員会を設立されてからは変化し、そして、運営管理と開発項目の権限が与えられて、「長白山保護開発管理委員会の詳細制定方案」という方案を策定し、「9+1パターン」を課題に据えて、それに加えて「統一企画、統一保護、統一開発、統一管理」という「4統一」政策方案を堅持し、長白山の発展に必要な準備段階が完成できた。

まずは、行政区画の分立による管理への障害を打破するためであることである。次は、長白山の実際の状況の複雑さへの配慮である。この点について、長白山国家森林公園の持続可能な開発のために、運営面で課題があるという理論仮説は概ね支持されると考えられた。

そして、長白山国家森林公園の開発について、開発以前の時期から観光業が存在したが、消費者権利への侵害や自然環境の破壊、工業環境汚染などが深刻であった。この様に、当時の長白山観光業は、持続可能な発展どころか、当地の森林資源を削り、犠牲にする発展の道筋をとっていた。そのため、本研究の理論仮説で言及したような持続可能な発展を実現させるために、優れた生態環境を整えることで人気を呼ぶ基盤を築く方針が定められた。この面から見ると、長白山国家森林公園の持続可能な発展を遂げるためには、環境保護という課題があったことが分かり、理論仮説の妥当性が立証されると考えた。

さらに、成立初期には、開発作業による原生生態の破壊、野性動植物への影響という課題に直面した。開発初期の段階では、長白山においては「どの様な開発運営方案を採用するか」、開発初期の段階の課題に据えて、「人為開発運営方案の破壊程度をどの様に最小限にするか」というポイントを重要位置に置いた。開発の過程でこれらの問題を解決するために、長白山国家森林公園は様々な努力をした。生態自然環境の復旧を図り、持続可能な発展を遂げるための第一歩を踏み始めた。

しかも、長白山保護開発管理委員会が、将来に向けては「どの様に既存方案を持続可能な発展戦略に繋げていくか」という課題に変わっている事実を明確した。現在、持続可能な発展の方針が決められ、「保護第一」の原則を堅持して決して揺らがないという強い態度を示した。

このように、本稿の理論仮説のように、中国の国家森林公園の多くは設立されて日が浅いため、持続可能な発展を遂げるうえで、運営・管理面に課題が残されていることが検証され、現在、長白山は入場券経済から高品質で環境にやさしい発展の道筋にモデルチェンジをし始めている。総じていえば、自然環境の破壊を修復し、森林観光地としての地位を固めることで、持続可能な発展を遂げる方針を貫き、本研究の理論仮説の正しさを証明したといえる。

本研究では、インタビュー調査と現地巡検を行った。3回にわたるインタビュー調査から、理論仮説の妥当性が検証できた。

まず、持続可能な開発を行うには、自然環境を保護して、計画的な開発、系統的な開発前の調査を行う必要性があったことが確認できた。そのため、長白山は開発の初期において、インフラ施設などの多くのプロジェクトの実施を遂行し、先進な観光都市を実現し、観光地の国際化を通して持続可能な発展を遂げることができた。この点から、サービスの改良や合理的な開発計画は、持続可能な発展を支えたということが明らかにされ、理論仮説が支持されることが分かる。

また、持続可能な発展を実現させるために、国家森林公園の景観やサービスを維持するだけ

でなく、文化や民族特色などを活かして文化的な魅力を注入し、長期的かつ持続的な企画を行うことが必要である。これも理論仮説に整合し、管理上の課題を解決するための重要な方法であると考えられた。

さらに、長白山国家森林公园の将来性について、理論仮説のように持続可能な発展を遂げるためにいろいろな課題が残ることが明らかとなった。国情や現在のトレンドから見て、経済的レベルが向上すると同時に環境が悪化する背景の下、田舎体験や森林旅行がますます人気が出ると予想できる。

そして、季節問題（シーズナリティ）によって、冬季のオフシーズンが長いことが、持続可能な発展の道筋に大きく障害をもたらしていたことも、長白山国家森林公园が抱えている課題であった。第3回目に実施したインタビュー調査によって長白山保護管理委員会は「保護という前提の元に発展を図るためには、長白山の冰雪経済を発展させる過程が最も重要な課題」であるという考えを提出した。

そのため、本稿は民衆向け五条の政策を中心に現地巡検を行った結果、民衆向け五条の政策は長白山国家森林公园の弱点を補完したものであり、冬における旅行者の数が一見少ないものの、冬に入って観光業が休業する過去に比べて、これは大幅な前進であることが確認できた。すなわち、政府が政策を支えることによって閑散期においても旅行者を惹きつけることができた。そして、民衆向け特惠政策を狙ったことも、操作仮説を支持し、政策宣伝の効果を裏付けていると考えられた。これらの政策は観光地の評判やサービスの向上につながり、これからの持続可能な発展にとって非常に重要だという結論を出すことができ、本研究の操作仮説を支持できると判断した。

前記のように、本研究は長白山国家森林公园の持続可能な発展について、さまざまな角度から研究を行い、さらに理論仮説と操作仮説の検証を行った、その結果、長白山国家森林公园の運営管理の面において、どの開発段階においても、理論仮説のように、持続可能な発展を遂げるには課題が多く残ることが立証された。長白山国家森林公园の発展は、理論仮説の様に、さまざまな課題を解決していく過程にあるともいえる。

また、現地巡検を通して操作仮説も立証され、政府が政策の支持する役割の重要性も明らかになった。これらの研究結果は、今後、中国各地に存在する国家森林公园の持続可能な発展を遂げるにも有意義な経験だと思われる。

引用文献・URL

1) 我国森林旅游地数量已超 8500 处

<http://travel.people.com.cn/n/2015/1011/c41570-27684589.html>

(2019年6月30日 最終閲覧)

2) <https://baike.baidu.com/item/%E5%8F%AF%E6%8C%81%E7%BB%AD%E5%8F%91%E5%B1%95/360491?fr=aladdin> (2019年6月30日 最終閲覧)

3) 2017年度森林公园建设经营情况统计表_统计数据_中国森林公园网

<http://zgsjgy.forestry.gov.cn/portal/slgy/s/2452/content-1071005.html>

(2019年6月30日 最終閲覧)

- 4) 魏長晶・李江風・王振偉『我国森林旅遊業發展総述』 林業經濟問題 2006
- 5) 李東瑾・畢華『中国国家森林公園旅游景区時空演变特徵及其驅動因素分析』 2016
- 6) 秦楠『国家森林公園教育旅遊產品開發研究』 西南大学 修士論文 2010
- 7) 吉田謙太郎・中西智紀『選択実験による郷土種に配慮した森林公園整備の経済的評価』 農村計画学会誌 28 卷 論文特集号 pp.189-194 2010
- 8) 白井珠美・岩崎寛・福島成樹；小平哲夫『森林公園における市民参加型癒しの森づくり』 日緑工誌 2011
- 9) 只木良也『森林生態学の100年』 森林科学 pp.18-20 2014
- 10) <https://baike.sogou.com/historylemma?IIId=66813263&cId=66813264>
(2019年6月30日 最終閲覧)
- 11) <http://www.changbaishan.gov.cn/> (2019年6月30日 最終閲覧)
- 12) 吉林省長白山開發建設(グループ)有限責任会社のホーム
http://www.cbskfjt.com/news/news_index (2019年6月30日 最終閲覧)
- 13) http://www.changbaishan.gov.cn/lygl/lydt/201803/t20180316_109640.html
(2019年6月30日 最終閲覧)

日本庭園の景観に対する外国人観光客のデスティネーション 選択性に関する研究

李佳恵

文学研究科観光学専攻修士課程

1. はじめに

日本政府観光局（JNTO）が公表した統計データ¹⁾によると、2017年の訪日外国人観光客数は前年比19.3%増の2,869万1千人で、データを取り始めた1964年以降最多となった。また2018年は推計値ではあるが、訪日外国人観光客数は約3,119万人と推計され、さらに増加し、記録を更新した。この様に訪日外国人観光客数が全世界的に堅調に増加する状況下においては、訪日外国人に向けた新たな観光地の創造や掘り起し、そしてそれに伴う持続可能で採算のとれる観光地計画を策定していくことがますます必要になってくると考えられる。

2016年3月30日、内閣総理大臣を議長とする「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」は、日本を、インバウンド観光を中心とした観光先進国にするために、新たな目標を提出した。具体的な内容は、観光先進国という新たなステージへ進むためには、訪日外国人旅行者数については、2020年には4,000万人、2030年には6,000万人を目指すこととされた²⁾。そのような目標の実現のためには動向分析よりもさらに緻密な分析を行うことが必要で、その分析結果に基づいた外国人の誘客戦略を立てていく必要があると考えられる。

次に、「JNTO 訪日旅行ハンドブック 2016」³⁾で発表された結果によれば、訪日外国人の訪問地の上位は、東京都、千葉県、大阪府、京都府、神奈川県などの都市圏、下位は鳥取県、島根県、徳島県、福井県、秋田県などの自然豊かな地域となっていることが分かる。しかし一方で、訪日旅行の目的については、71.2%の中国人が自然・景勝地観光ということを選んだことも事実である。中国以外の他国についてみると、それぞれベトナムは54.8%、オーストラリアは70.9%、アメリカは54.6%、カナダは66.5%、ドイツは46.8%、フランスは61.1%、イギリスは61.4%の割合で、自然・景勝地観光に興味を示していることがわかった。つまり、自然の豊かな地域においては、現状ではその優位性を十分に生かすことができず、観光のデスティネーションとして選択されていない点が課題である。一方、都市地域においては、現状でも観光のデスティネーションに選択されているが、自然的要素を更に強化すればより魅力的な対象となりうることを示しているとも考えられる。

また一方で、大規模な公園が各地にあるロンドンや、マンハッタン島に広大なセントラルパークをつくったニューヨーク、ブローニュの森を抱えるパリなどの様に、観光客が気軽に訪れる広大な公園緑地が少ない状況にある日本の大都市、東京において、庭園がインバウンド観光に対してどの様な役割を果たしているのかという課題も興味深い。

本文の後段で、本修士論文では、東京にある都市公園である東京都立庭園を対象として調査

が行われていることを改めて述べるが、東京（江戸）に庭園が作られたのは、一般的に江戸時代以降と考えられている。日本庭園の歴史は、古くは飛鳥時代にもさかのぼることができ、現存する庭園に限っても平安時代まで遡れるが、江戸幕府が開かれるまでは現在の東京地域は片田舎であったため、著名な庭園がつくられることはほとんどなかった。

このように、古代から様々に作られてきた庭園は、時代が古いとか、デザインに特徴があるということだけでなく、当時の造園技術・技法の水準を窺うことができる生きた資料としても貴重であり、その多くが文化財や公園として指定・保存されて現在に至っている。

以上をまとめると、現在の日本ではインバウンド観光の振興が重要であること、インバウンド観光の振興においては各市場の動向を抑えることが重要であること、インバウンド観光では自然・景勝地観光が重要であること、都市においても観光デスティネーションとして自然を扱うことが重要であること、都市の自然としては庭園が重要な役割を果たすこと、庭園は文化財であるため保存が重要である一方でそれを活用した観光振興が重要であることなどが指摘できる。従って、東京を対象に庭園を対象とした観光動向を研究することには価値があるものと考えられた。

2. 日本庭園と文化財

上記のとおり、東京を対象に庭園の研究をすることが重要であることが指摘できたが、本章では調査に入る前に、用語の定義と概念の共有を確認する目的で、日本庭園およびそれに関連する知識を、文化財の側面から整理していきたい。

2.1 日本庭園の歴史と様式

日本庭園はフランス庭園などに代表される西洋庭園とは違って、「曲線による造形が多く、左右非対称にすることが多い」のが大きな特徴である。それは日本庭園が自然の風景を手本にして造形していることに起因している。なお、日本庭園も時代ごとに流行りがあり、庭園様式によってかなり特徴も異なる。

本論ではその様な認識に立ちながら、各時代に分けて日本庭園の特徴をまとめて、以下のとおり説明することとした⁴⁾。

2.1.1 飛鳥時代（6世紀末頃～710年）

古代中国では不老不死、永遠の生命を求める神仙思想があり、達成した仙人は東海に浮かぶ蓬萊・方丈・瀛洲（えいしゅう）・壺梁（こりょう）の四島からなる神仙島住んでいるとされていた。中国や朝鮮半島の庭園では、この古くからの神仙思想に基づく庭園がつくられており、日本にも飛鳥時代に伝えられ、飛鳥浄御原京跡苑池遺構などに取り入れられた。この庭園が以後の日本庭園のデザインに大きな影響を与えていると考えられている。

2.1.2 奈良時代（710年～794年）

710年、都が奈良に移り平城京が整うにつれて、庭園文化も発展していった。この時代から、大陸的な幾何学的な庭園様式にとらわれず、次第に曲線が中心の造形が増え、全体の様式が和式化された。また中島や州浜など日本庭園の特徴的な造景も、この時代から確認されている。

仙人が住む神仙島、深山の高峰を庭に表現した神仙蓬莱思想の庭、曲水の宴を開くための庭などもこの時代に存在したことが確認されている。

2.1.3 平安時代

(794年～1192年 *平安時代の終了年は諸説あるが、本論では1192年としている。)

平安時代は貴族文化が栄え、寝殿造りの庭が多くつくられた。この時代は、平安貴族の間で、曲水の宴などの連歌の会が頻りに催されていた時代である。寝殿造りの庭園も当時のものが現存はしていないが、当時の書籍や絵図などで確認することができる。

2.1.4 鎌倉時代

(1192年～1333年 *鎌倉時代の期間には諸説あるが、本論では左記のとおりとした。)

鎌倉時代になると、武士階級が台頭し、鎌倉幕府(神奈川県)が開かれた。そして貴族・武士階級の住居建築も、平安貴族のもとで完成した寝殿造りから、比較的簡素な書院造りに様変わりしていった。また中国から禅が伝わるようになり、日本庭園も大きく禅の影響を受けるようになった。その結果、武士・禅僧の間に禅の思想が広がり、思索しながら池泉の周りを散策する池泉回遊式庭園が流行した。

2.1.5 室町時代(1336年～1573年)

この時代では、禅宗が隆盛を極め、枯山水庭園が発達した。禅宗寺院を中心に白砂と石を使い、水を使わずに水を表現する枯山水が流行した。枯山水自体の作庭技法は既に平安時代からあったものだが、室町時代に禅寺の方丈庭園で発展し、独立した庭園としての地位を確立した。

2.1.6 安土桃山時代(戦国時代)(1573年～1603年)

この時代は、戦国武将や大名が庭園文化をリードし、城郭庭園がさかんにつくられた。戦国時代は権力誇示が重視され、大規模な城郭、豪華絢爛な障壁画が流行し、それに伴って豪快な石組を使った城郭庭園が流行した。その一方で、茶の湯の発展とともに、茶庭(露地)という新たな庭園意匠が出現した。茶庭(露地)は、武士だけではなく庶民の間にも普及していった。

2.1.7 江戸時代(1603年～1868年)

江戸時代には、将軍や大名などを中心に、城や屋敷を築く際に庭園内を回遊することができる回遊式庭園がつくられるようになり、池泉を中心とした大名庭園が各地につくられた。この時代の大名庭園は池泉回遊式が基本であった。

2.1.8 明治時代以後(1868年～)

明治時代になると鎖国が解け西洋文化が解禁され、近代産業が始まった。そして実業家を中心に、芝生面を広くとった明るい庭が多く作庭されるようになった。江戸時代の回遊式庭園などの伝統的な庭園は、明治期に取り壊しを受けたり、西洋庭園へ模様替えされたりして、和洋折衷庭園が誕生した。

2.2 日本庭園の景観構成

景観学で言うところの「景観構成要素」という用語は、観光学の分野では「景観資源」とも呼ばれる概念に通じるところがある。「景観構成要素」ないしは「景観資源」は、自然景観構

成要素（自然景観資源）、人文景観構成要素（人文景観資源）、そして自然人文景観構成要素（自然人文景観資源）の3つに大別される⁵⁾。

日本庭園は、上記3種類の各種の景観を運用することを通して設計される。巧みに水、植栽、道路、広場、石、橋、日本風の建造物などの景観構成要素を結びつけている。豊かなそれぞれの庭園景観空間は、来訪者を癒すような空間環境的な雰囲気をめざして造営されることが多い。

庭園を構成する各要素(資源)の中でも、緑は、自然の豊かな庭園の景観においては、主要な景観構成要素(景観資源)として存在する。また、緑は、老松など景観の主体となることもあるが、多くは景観の背景となる。その様な背景の緑も、新緑や紅葉の時期には景観の主体となり、庭園の特徴を表現する重要な景観構成要素(景観資源)となる⁶⁾。

日本庭園では水景観が創造されることが多く、合理的に活用され、庭園景観設計の重要な位置づけを占めていることを示している。水景は、庭園景観設計において、人や動物に対する目的的存在と位置付けられ、水の周辺で人や鳥などの動物が交流する場所を提供する。また、特に特定の方向に眺望が開けている場合は、完全に水平な空間が確保できる水景は、眺望の対象に対する「引き」の空間として重要な役割を果たす。

建築物等は、自然景観や周囲の町並みを背景として、景観の主体となることが多く、特に歴史や文化等を強く表現する景観構成要素(景観資源)である。また、建築物は単体としてだけではなく、複数でも集落等の建造物群として景観の主体となり、遠景においてもビル群などであれば主要な景観の背景ともなる。

季節の移ろいは、庭園景観を繰り返し訪れる点で特に重要である。季節の変化に伴い、景観は大きく変化する。季節の移ろいには、地域の気候と植生が大きく影響する。

お祭りやイベントも、重要な景観の変化をもたらす。いつもは静かな庭園でも、お祭りやイベントの時は、地域が隠し持っていた人々の個性や文化、歴史の表情が強く現れ、個性的な景観を創り出す添景となる。これらの非日常的な要素も庭園の個性ある景観を構成する要素となる。

2.3 文化財

文化財は、日本の長い歴史の中で生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産である。現在、日本の文化財保護法には下記の6種類の文化財が明記されている⁷⁾。

2.3.1 有形文化財（建造物／美術工芸品）

文化財保護法によると、建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、日本にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財と呼んでいる。

2.3.2 無形文化財

文化財保護法によると、「演劇、音楽、工芸技術、その他の無形の文化的所産で日本にとって歴史上または芸術上価値の高いもの」を「無形文化財」という。

2.3.3 民俗文化財

文化財保護法によると、民俗文化財とは「衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋、その他の物件など人々が日常生活の中で生み出し、継承してきた有形・無形の伝承で人々の生活の推移を示すもの」である。

2.3.4 記念物

文化財保護法によると、記念物とは、「貝塚、古墳、都城跡、城跡旧宅等の遺跡で、我が国（日本：筆者注）にとって歴史上または学術上価値の高いもの」、「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳等の名勝地で我が国（日本：筆者注）にとって芸術上または鑑賞上価値の高いもの」、「動物、植物及び地質鉱物で我が国（日本：筆者注）にとって学術上価値の高いもの」という文化財の総称である。

2.3.5 文化的景観

文化財保護法によると、文化的景観は、日々の生活に根ざした身近な景観であるため、日頃その価値にはなかなか気付きにくいものである。

2.3.6 伝統的建造物群保存地区

1975年（昭和50年）の文化財保護法の改正によって、伝統的建造物群保存地区の制度が発足し、城下町、宿場町、門前町など全国各地に残る歴史的な集落・町並みの保存が図られるようになった。

3. 先行研究の検討

先行研究は、まず全国の論文、図書・雑誌や博士論文などの学術情報で検索できるデータベースサイト「CiNii 学術情報ナビゲータ」にて検索を行った。しかし、「CiNii」にて検索できない研究や資料がある可能性を踏まえ、公益財団法人東京都公園協会により管理されている「みどりの図書館（東京都日比谷公園内）」を訪れ、補足的に研究論文の検索を行った。

上記2つの検索方法から参考できる研究論文を可能な限り収集し、これまでの研究から明らかになってきた主要な既存研究の内容について本章では取りまとめる。

3.1 外国人の日本庭園観についての研究

現在「CiNii」にて探し当てられる「日本庭園観」の景観的側面についての文献は3件ある。本章では、そのうち2件を取り上げる。ただし2件ともに、ほぼ約20年以上前の研究で同一研究者によるものであった。

鈴木誠ら（1989）は、外国人と日本人の日本庭園観について、SD法により調査し、 χ^2 二乗検定、因子分析を用いて分析・考察した。調査した庭園は5庭園7ヶ所、被験者数は外国人140名、日本人155名であった。結論として、外国人が日本庭園に明彩感・躍動感を感じているのに対し、日本人が「渋味」「わび・さび」に通じる、陰影感・静寂感を感じている等の国による差異を実証的に明らかにした⁸⁾。

次に鈴木誠（1997）は、「知日派」、「親日派」、「無関心派」と考えられる欧米人3グループを想定し、現代における欧米人の日本庭園観の現状把握に努めた。その結果、現代の欧米人、特

に研究者、知日派などの日本に関する専門家の日本庭園理解は、知識レベルにおいて、一般の日本人よりも高い認識にいたっているとの結論も得た⁹⁾。

3.2 観光地域についての研究

「CiNii」にて「観光地」、「選好」、「観光資源」で組み合わせ検索を行い、観光地域についての先行研究のレビューを行った。検索結果は、合計で52件がヒットしたが、そのうち下記の2件が本論の先行研究として参考になると考えられた。

杉本（2012）は、日本全土における観光資源の分布特性や地域の観光資源特性を地域統計学の手法を用いて分析し、明らかにした。そして、多様な観光資源の中で、「社寺・庭園・公園」は、地域偏在性の特に高い観光資源として、「都市人文資源（社寺、博物館・美術館、庭園・公園、史跡）」に特化した地域クラスター3に帰属することを指摘した¹⁰⁾。

谷口ら（2012）は、観光客と地域住民の地域愛着に与える影響について分析し、地域を好きだと思ふ選好の醸成を通して、より深い段階で地域を大切と感じる感情や「変わらないでほしい」という願いである持続願望の醸成へつながる構造が存在することを示した¹¹⁾。

3.3 文化財庭園についての研究

本論文では、「文化財庭園と観光」および「東京都文化財庭園」の側面に関連する研究を取りまとめた。

3.3.1 文化財庭園と観光

文化財庭園と観光に関する研究としては、「CiNii」にて「文化財」、「観光」、「庭園」の、以上3つのキーワードで検索を行うこととした。その結果、合計で9件がヒットし、そのうちの2件が本修士論文の参考になると考えられた。

井原縁（2017）は、文化財としての保存施策と観光資源としての価値づけとの相関性を歴史的に検証し、基礎的情報の整理を通し考究していた。その結果、「名勝」という概念には場の全体性や風致を捉えようとする感性的側面が強い特性があること、さらにこのような本質的特性が、「観光資源」としての価値と関連性が高いことが明らかにした¹²⁾。

梅本美奈子（2018）は、庭園を始めとした歴史的文化遗产を活用した都市観光を展開する金沢において、それらを継承する人材育成の取り組みと伝統造園継承技術が金沢職人大学校で進められていることを示した¹³⁾。

3.3.2 東京都文化財庭園

東京都文化財庭園に関する研究としては、「CiNii」にて「文化財」、「東京」、「庭園」の、3つのキーワードで検索を行うこととした。その結果、合計で86件がヒットし、そのうちの2件が本研究の参考になると考えられた。

小野健吉（2017）は、東京都所管文化財庭園、特に浜離宮恩賜庭園・小石川後楽園・六義園の3庭園の近年の活用状況等について統計資料を用いて入園者数やその日本人・外国人比率等を把握・整理し、東京都公園協会が行っている各種の取組みについても若干の考察を加えて、文化財庭園の活用方法を検討していた¹⁴⁾。

小野良平 (2018) は、東京の文化財庭園の浜離宮恩賜庭園での英語の活用を例にとり、人々を集めた居場所を提供する適度な位置づけ、インバウンド観光振興のための文化財の活用というものがまずは十分警戒されなければならないことを指摘していた¹⁵⁾。

3.4 外国人旅行者向けの情報発信についての研究

本論文では、外国人旅行者向けの情報発信についての先行研究に着目し、日比谷公園にある「みどり図書館」にて、「情報発信」、「外国人」以上の2つのキーワードで文献検索を行った。その結果、下記の研究が先行研究として参考になると考えられた。

山口亜希子 (2014) は、都市部のオープンスペースの施設管理者などがインターネット上で行っている訪日外国人観光客を対象とした情報発信の実態について調査した。その結果、日本庭園や城などの都市部のオープンスペースが魅力度の高い観光資源として受け止められており、また多くの施設管理者などが外国語によるインターネットを通じた情報発信に取り組んでいることが明らかとした¹⁶⁾。

3.5 観光競争力についての研究

本論文では観光競争力についての先行研究を調べるため、「CiNi」にて「観光競争力」というキーワードで検索を行うこととした。

三ツ木文浩 (2018) は、WEFの「旅行・観光競争レポート2017」におけるランキングの中で、日本は136カ国中第4位であったことの要因を、指標から読み解き明らかにした。外国人のニーズを満たすような多様な観光資源の情報発信をデスティネーション・マーケティングの視点で展開をしていき、日本のイメージを醸成する必要があると指摘した¹⁷⁾。

4. 仮説

上述した先行研究の中にも、外国人が抱く日本庭園観については、色々な要素があるという指摘がなされている。本論文では、その様な指摘も考えに入れ、また調査対象が東京都の文化財庭園であることを考慮して、

「東京都公園協会が、東京都立庭園として管理している方策と、外国人観光客による日本庭園に対する観光デスティネーションの選択性との間には関連性がある」

という理論仮説を設定した。

更に、具体的に本修士論文で検証していきたい操作仮説としては、

「日本庭園に対する情報発信と、外国人観光客の観光デスティネーションの選択性との間には関連性がある」

と設定して、調査を進めることとした。

5. 目的・対象・方法

5.1 目的

日本庭園には、豊かな歴史に基づいたバラエティに富んだ種類がある。またすでに本論でも

触れたとおり、来日観光する外国人が今回の訪日旅行でしたい活動の中で、自然・景勝地観光という観光目的は、全来訪者の半分以上を占めていることが認められる。その割合は国によっては観光客の70%に達していて、自然・景勝地観光が、日本へのインバウンド観光の一定的な比率を占有すると説明できる。

つまり、現在、自然・景勝地観光が旅の趨勢になっており、その中でも庭園は重要な観光対象であることは間違いない。しかし、外国人の日本庭園観についての研究はこれまでも行われてきたものの、庭園の選好性やDESTINATIONとしての選択性に関する研究は比較的少ないことが明らかとなった。したがって本論文は、実際の外国人観光客の日本庭園への来訪実態を明確にする調査を行うとともに、外国人の日本庭園に対する理解の仕方や日本庭園に対して抱いているイメージを把握し、また現代における外国人による日本庭園景観についての選好性の形成のプロセスなどを明らかにし、観光DESTINATIONとしての選択性を明らかにすること目的とする。

この様な研究を行うことで、日本庭園の景観に対する多様な主体の評価を深く理解することができるようになるとともに、外国人観光客に対する庭園の観光資源としての有効な活用の方策に資する知見を得ることができると考えられる。

5.2 対象とした4庭園の紹介

(1) 浜離宮恩賜庭園（江戸時代：回遊式庭園、将軍の庭）：都立9庭園の中では相対的に面積が広い。そして、東京の代表的庭園として位置づけられ、潮位の関係で海水が1日2回庭園内の池に流れ込む「潮入り」の庭園としても有名である。

(2) 向島百花園（江戸時代：庶民の庭）：都立9庭園の中では、唯一庶民が策定した日本庭園である。大名によって策定された庭園とは違い、庶民の花の楽しみをテーマにしており、現代の観光的な観点に立てば、江戸時代につくられた「テーマパーク」であるともいうことができる。

(3) 六義園（江戸時代：大名庭園）：江戸時代に作庭された和歌のテーマパークであるということができる。江戸時代には柳沢吉保の庭であったが、明治期に入り、財閥・岩崎家へと引き継がれた。六義園は造園当時から小石川後樂園とともに江戸の二大庭園に数えられていた。

(4) 清澄庭園（江戸時代：回遊式庭園）：名石や、隅田川の水が特徴の日本庭園である。清澄庭園は、江戸時代に作庭された回遊式庭園であるが、近代にはいり、財閥・岩崎家の手にわたり、岩崎家による庭石のコレクションが庭園内各所に配置され、「石の庭」としても現在は有名である。

5.3 方法

本論文では、下記のとおり、インタビュー調査、ラインセンサス調査、SNS情報を分析する資料調査の3種類の調査を行った。

5.3.1 インタビュー調査

本修士論文を進めるにあたり、上記で示した仮説を検証するために効果的な研究手法をとるために何をすればよいかを探るため、また都立9庭園の外国人観光客の利用実態に関する情報

日本庭園の景観に対する外国人観光客のデスティネーション選択性に関する研究を整理するために、ラインセンサス調査や資料調査を進める前に、下記に示したとおりのインタビュー調査を行った。

日時：2018年06月18日15:15～17:00実施

インタビュー担当者：田中 伸彦・李 佳恵

インタビュー対象者：菊池 正芳（東京都公園協会 公園事業部長）
永田 雅之（同 公園事業部 文化財庭園課長）

場所：浜離宮恩賜公園内の事務所（サービスセンター会議室）

インタビューの内容：

本論文で設定した仮説に基づき、東京都立9庭園に関して、5つ質問項目を作り、「都市緑化、公園緑地、河川及び水辺環境に関する事業を通して、都民生活に安らぎとゆとりをもたらし、あわせて日本の文化を世界に発信する」ことを目的として東京都立公園の管理も行っている（公益財団法人：公財）東京都公園協会に提出した。そして、上記の菊池氏と永田氏に面接形式のインタビュー調査を行い回答して頂いた。

5.3.2 ラインセンサス法

本調査は、対象とする都立庭園における外国人観光客の、デスティネーション選択性の特徴の一端を明らかにするために行う。

ある観光対象地の、観光客群集の数や属性を明らかにする方法には、ラインセンサス法やテリトリーマッピング法、定点調査（スポットセンサス）などがある。本論文で採用した手法はラインセンサス法で、今回の調査では、調査ルートを歩きながら25m（あるいは50m）以内に現れた観光客数を記録し、観光客を調べるといった方法をとった。

5.3.3 資料調査

資料調査では、SNS情報発信に着目した。本修士論文では、主に都立庭園に関して日本のツイッターから発信される情報と、中国語のSNSメディア上のデータ分析を通して、海外へ向けて日本庭園の情報発信が推進されている程度を分析した。

6. 結果

6.1 結果1：インタビュー調査の結果

(1) 問題1について

「平成30年事業計画書」の中に、経営理念は「東京から文化財庭園の魅力を世界に発信します」と書いていますが、具体的はどんな対策がありますか。

まずは、東京都あるいは（公財）東京都公園協会が行っている対策は、国内に対する対策と、海外に向けての対策に分けることができる。そのうち、国内への対策は6つポイントに分けることができる。

- ① 国内の住民に対する対策で、「文化財に対する意識の徹底の必要性」である。
- ② 「作庭意図を尊重した維持管理」である。

李佳恵

- ③「貴重な樹木の重点的な管理」である。
- ④「伝統技術の継承と人材育成」である。
- ⑤ 庭園アドバイザーによる助言・指導・専門家や庭園アドバイザー委員等の助言・指導を反映した「正統的な管理運営」である。
- ⑥「質の高いサービスの提供と利用者層の拡大」である。

一方で、海外に向けての対策は5つポイントがある。

1つ目は、「庭園の魅力アップと江戸東京の庭園文化の魅力発信」である。この対策については5つの方策がある。具体的には、①多言語庭園パンフレットの配布；②ウェルカムチケットの配布；③ホームページ、ツイッターによる利用案内や花の見ごろ情報の提供；④ライブカメラによる映像配信（六義園）；⑤マスコミ、ホテル、旅行会社、鉄道会社等とのタイアップによる広報活動の展開である。

2つ目は、「自然の魅力を活かした取組」である。

3つ目は、「歴史資源を活かした取組」である。

4つ目は、「連携イベントの実施」である。

5つ目は、「海外利用者層の拡大と利用促進」である。庭園多言語ガイドボランティアによる園内解説の充実のため、外国人向けボランティアガイドの実施(浜離宮恩賜庭園、小石川 後楽園、六義園、清澄庭園にて実施)が必要である。または、子ども向け庭園ガイド、子ども向けイベントの実施もしている。

(2) 問題 2 について

「平成 30 年事業計画書」の中に、重点事業の一つ「Web サイトや外国人向け広報媒体、観光案内所等を通して多言語での情報提供を推進する」と記載されている。確かに貴協会が管理されている各庭園のツイッターがあり、世界に発信できると考えられているが、実際には日本語が多い。多言語での情報提供を推進することはいつはじめますか。また、外国人向けの広報媒体はどのような媒体を考えていますか。

今まで、5庭園（浜離宮恩賜庭園、旧岩崎邸庭園、殿ヶ谷戸庭園、清澄庭園、六義園）については英語によるツイートがある。ただし、今までに行った英語のツイートは 100 件程度くらいである。

現在は、花の見ごろの時期など、時機を見て要所要所で英語のツイートを職員が行っている。しかし、高頻度のツイートの実施は、英語の情報発信専門官がいるわけでもなく難しい現状にある。インバウンド観光客の利便性向上の為には、これからは、この様な点についても中心として取組みたい。概して、英語のツイートは、日本語を話す職員にとっては難しいという問題がある。

(3) 問題 3 について

管理されている各庭園の観光客数のデータ、特に外国人観光客の入園料または収益施設の統計または比率はどのくらいですか。無料の場合は計算のやり方がありますか。

現在、東京都の文化財庭園における外国人観光客数の統計の集計方法については、入園料を

日本庭園の景観に対する外国人観光客のデスティネーション選択性に関する研究
払う窓口で簡単に数える程度である。外国人と日本人を区別して集計したいとは考えているが、実際には、アジアの方の顔は日本人と区別しにくい。そのため、判断基準は言語に大きく頼っているのが実情である。

なお、外国人観光客の数は、言語リーフレットの配布状況からも推察できるとの回答もいただいた。現状では、リーフレットの言語別の配布比率は、英語が3分の2、フランス語が10%、中国語が5%、ハングルが3%程度とのことである。この状況を見ると、東京都の文化財庭園に関心を持ち、リーフレットを受け取る外国人は、東アジア系よりも欧米系のほうが多い可能性が捨てられないと推察された。

東京都の文化財庭園で現在行われている収益事業については、現行の事業は「売店」における売り上げ程度であるとのことであった。現状では他に収益事業は原則行っていないそうである。そのため、公園に入ってくる収益はそれほど多くない。また、収益は原則として公益還元に戻すことになっていることも確認できた。

(4) 問題4について

管理されている各庭園のセールスポイントは特にありますか。

1) 都立9庭園全体のセールスポイント

共通年間パスポートを発行している：

2018年現在:一般：4,000円、65歳以上：2,000円。9庭園が1年間入園自由である。

2) 各庭園のセールスポイント

① 浜離宮恩賜庭園（江戸時代：回遊式庭園、将軍の庭）：面積が広い。東京の代表的庭園として位置づけられ、潮位の関係で海水が一日2回庭園内の池に流れ込む「潮入り」の庭園としても有名である。

② 向島百花園（江戸時代：庶民の庭）：庶民が策定した日本庭園。花の楽しみをテーマにしている。

③ 六義園（江戸時代：大名庭園）：江戸時代に作庭された和歌のテーマパークである。

④ 旧古河庭園（大正時代初期：洋風庭園）：地形の高度差、建物+庭、洋風+和風、バラ園が特徴的な庭園である。

⑤ 旧芝離宮恩賜庭園（江戸時代：回遊式大名庭園）：池を中心とした回遊式庭園である。オフィス街が近いので、昼休みに周囲のサラリーマンが年間パスポートを使って、園内で昼ご飯を食べることが有名である。

⑥ 旧岩崎邸庭園（明治時代：大名庭園を改修）：建造物が重要文化財に指定されている。ちなみに庭園自体は国の文化財指定を受けていない。

⑦ 小石川後楽園（江戸時代：回遊式庭園）：池を中心とした池泉回遊式庭園で、日本国内の名所や中国の風景を模している部分がある。

⑧ 殿ヶ谷戸庭園（大正時代：回遊式庭園）：別荘と庭が独特の風致を醸し出す、回遊式林泉庭園である。

⑨ 清澄庭園（江戸時代：回遊式庭園）：名石、隅田川の水が特徴の日本庭園である。清澄庭園は、

李佳恵

江戸時代に作庭された回遊式庭園であるが、近代にはいり、財閥・岩崎家の手にわたり、岩崎家による庭石のコレクションで現在は有名である。

(5) 問題5について

東京都公園協会の成立の意義／社会的な意義は何ですか。公園と庭園が重なる部分がありますので、どういう管理の方策にすればいいですか。管理の方策と外国人観光客数の関係がありますか。

(公益) 東京都公園協会は、設立以来 60 年間、東京の都市緑化を推進し、公園緑地や水辺空間の利活用を通して、都民生活に安らぎとゆとりをもたらすとともに、東京から日本の文化を世界に発信することを経営理念として、事業展開を図ってきた。

こうした東京の緑の多面性を理解することが、東京の公園緑地の歴史、文化、自然が一体となった魅力を、守り、育て、発信していくことにつながる。都立公園緑地の管理運営事業のみならず、多くの都民の方々に公園緑地の魅力づくりに参画していただくための都民協働や、都市緑化の推進、利用者の方々に上質なサービスを提供する便益施設の運営など、公園緑地の管理運営を支えるすべての部門が一体となった取り組みの方向を示した。都民の皆から信頼され、必要とされる公益財団法人として、社会に貢献していくことを目指している。2020 年には、東京オリンピック・パラリンピックが開催される。この機会を最大限に生かし、東京の魅力を、文化財庭園や霊園を含む東京の公園緑地から広く発信することも課された大切な役割である。これからも、東京の公園緑地を通して、新たな公園文化を創造して参る。

6.2 結果2：ラインセンサス調査の結果

本ラインセンサス調査を用いて東京都立庭園での修士論文の作成するにあたっては、調査の前に「行為の許可申請」という東京都の手續きと、各庭園での同申請に必要な依頼文のフォーマットが必要となることで、2018 年の晩秋より準備を始め、2019 年に入ってから下記のとおり、調査の相談を行った。

日時：2019 年 01 月 11 日 13:30~14:30 実施

担当者：田中 伸彦・李 佳恵

対象者：永田 雅之（(公財) 東京都公園協会 公園事業部 文化財庭園課長）
鈴木 茂生（同 文化財庭園係 係長）

場所：(公財) 東京都公園協会本社

(新宿区歌舞伎町 2-44-1 東京都健康プラザ「ハイジア」10 階)

内容：

申請を行うにあたり、著者は事前に、調査の予定日時、対象地の調査ルートと調査エリアの資料を準備した。そして、永田課長と鈴木係長から、貴重なアドバイスを伺いながら実施内容の修正を行い、最終的には、以下のような調査スケジュールを設定した。

概要としては、「六義園」、「浜離宮恩賜庭園」、「清澄庭園」、「向島百花園」の4か所の庭園に対して、2019年1月から4月の4か月間に毎月各1回、昼から午後にかけて1日3回のラインセンスを行うことにした。

6.2.1 調査の日時と調査員

設定した調査の日時と調査員は下記のとおりである。

・調査日時：(週末、祝日またはイベントがある日を原則的に優先した。)

六義園： 2019年1月19日(土) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年2月11日(月祝)11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年3月20日(水) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年4月27日(土) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00

浜離宮恩賜庭園：

2019年1月27日(日) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年2月10日(日) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年3月22日(金) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年4月28日(日) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00

清澄庭園： 2019年1月20日(日) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年2月13日(水) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年3月23日(土) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年4月29日(月祝)11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00

向島百花園：2019年1月26日(土) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年2月09日(土) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年3月24日(日) 11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00
2019年4月30日(火祝)11:30~12:30 12:45~13:45 14:00~15:00

・調査員：李佳恵

6.2.2 調査の対象

調査の対象地は、上述のとおり、(公財)東京都公園協会によって管理されている六義園、浜離宮恩賜庭園、清澄庭園、向島百花園の4庭園となる。それぞれの園内の調査ルートと調査対象エリアは、事前申請における相談の結果どおりとした。

6.2.3 調査エリアの景観構成要素(景観資源)

対象庭園エリアの景観構成要素(景観資源)は、「自然的景観」、「人文的景観」と「休憩地」のための施設の3つの方面から類型化ができる。「自然的景観」は山、島、湖、海などを模した特別な景色である。また、「人文的景観」は橋、歴史的建造物、現代的建造物と石碑など歴史的な人工物等のことである¹⁸⁾。

6.2.4 調査の方法

本調査では、各園内の調査対象エリアの全部のルートを、徒歩で時速約1~1.5kmの速度で歩きながら、片側2.5m以内(ルートを中心に幅5mの範囲)で観察された外国人観光客の国別と個体数を記録した。なお、調査員は、来訪者の会話から、中国語、台湾語、韓国語、日本

李佳恵

語、ベトナム語を話す観光客を判別することが可能である。また、マレーシア人、フィリピン人、アラビア人の装いには特徴があるので、その点を目視で判断した。西洋人については、まず目視で簡単に人数を数えることにした。そして来訪者の庭園鑑賞の支障とならない程度に、出身国だけを簡単にヒアリングした。

6.2.5 調査の結果

今回の調査では、自分の意志でその庭園を訪れた外国人観光客の動向を把握したいという目的があるため、ツアーガイドを付けて個人の意思とは関りなく一律に各地を巡っている旅行団体の人数は、今回の調査対象としては結果の中に記入しないことにした。旅行団体の特徴は、ツアーガイドが旅行団体メンバーを率いて旅程にある全ての観光スポットを案内して遊覧することである。これは観光客自身の選好性に伴う能動的な行為意識に属しないと考えた。

なお、今回のラインセンサスの中で、各庭園で確認された団体旅行は下記のとおりであった。

浜離宮恩賜庭園：西洋人による旅行団体がメインであった。今回の調査で観察された具体的な旅行団体は、

①20人の旅行団体＋英語通訳1人（同時にガイドの役割をする）

②25人の旅行団体＋英語通訳1人（同時にガイドの役割をする）

③30人の旅行団体＋英語通訳2人（同時にガイドの役割をする）

であった。

清澄庭園：台湾及び韓国からの旅行団体がメインであった。今回の調査で観察された具体的な旅行団体は、

①14人の旅行団体＋英語通訳1人（同時にガイドの役割をする）

②白人13人＋英語通訳1人（同時にガイドの役割をする）

③台湾の旅行団体27人＋ガイド1人

④韓国の旅行団体30人＋ガイド1人

であった。

1) 六義園のラインセンサス調査結果

六義園に対しては、中国人と台湾人の来訪客が多かった。反面、お土産屋に行き、お茶を飲む人はラインセンサスの限りでは全て欧米人（実際は日本人がいて、本論文は不記入になる）であった。つまりお土産やお茶といった場面ではアジアの人はいなかった。欧米人は1人で回る単独観光のパターンがあって、一方で家族団体旅行のグループも同様に見かけられた。アジア人については、ラインセンサスの限り全て2人以上で、複数でいっしょに観光していた。写真を撮っていた外国人観光客は、白人かアジア人であり、比較的が多かった。また、ラインセンサスの限りでは、全ての外国人観光客は英語等通訳案内士を利用していなかった。また、季節的には2月に訪れた観光客人数が一番少なかった。そして、1月、3月と4月との間の観光客人数の差はさほど大きくなかった。

2) 浜離宮恩賜庭園のラインセンサス調査結果

浜離宮恩賜庭園に対して来訪してくる外国人観光客の内訳は、基本的には欧米人であり、団体旅行と比べると個人旅行の比率が大きいという特徴があった。現場で調査した時には、浜離

宮恩賜庭園の面積が比較的に大きいため、観光客が園内各地を分散していることが確認できた。ラインセンサスで確認している中で、中国人、台湾人、韓国人と日本人との面構えは比較的接近していて、混雑時に全ての国籍を区分しにくかったため、東アジアからの外国人観光客数をラインセンサスでは落としてしまう可能性もあったという事実があった。欧米人については、同様に混雑のため国籍を聞く時間が足りなかったなど一連問題が発生したこともあった。つまり浜離宮庭園では、調査中に一定程度の困難がもたらされていた。しかし可能なかぎり、ラインセンサスでは調査中分かりうるすべて結果を記録した。また、浜離宮庭園においては1月と2月に訪れた観光客人数が相対的に少なく、3月から観光客人数は多くなっていった。次に、利用客以外は入りにくい閉鎖空間の茶屋があるため、ラインセンサスでは筆者が橋上に立って外部から傍観して、中に入って行かなかったことに関して、お茶を飲んでいた東洋系の人が東アジア人か日本人か他の国籍かを区分することができなかった。その結果、お茶を飲む人は全て欧米人になるという記入結果になっている。

3) 清澄庭園のラインセンサス調査結果

清澄庭園に対しては、欧米人の来訪が多かった。他の庭園と比べると、アジア人の中では韓国人と台湾人が清澄庭園に行くケースが多かった。そして、ここでは個人旅行欧米人が英語通訳案内士を利用したケースが確認できた。また、2月に訪れた観光客人数が一番少なかった。1月、3月と4月の観光客人数の差は、さほど大きくなかった。

4) 向島百花園のラインセンサス調査結果

向島百花園に対しては、どの国籍においても外国人観光客がほとんどいなかった。確認された来訪者のほぼ全ては、付近の日本人ではないかと考えられ、全体はひっそりとした感じであった。花の時期ではないという問題がここではあったとも考えられる。1月に2月に梅は少し咲いたが、それ以外の花は3月以降から開花していた。

6.2.5.1 観光客総人数から見た各庭園対象地の特徴

4か所の庭園の中で、外国人観光客数が一番多く観察されたのが浜離宮恩賜庭園で、計389人であった。次は六義園で216人である。3番目は清澄庭園で149人であった。一番少なかったのは向島百花園の19人で、他の3庭園と比較して極端に少なかった。向島百花園については、基本的には日本人が主体で、外国人観光客が集中してみられるという現象は観測されなかった。

6.2.5.2 各庭園対象地の観光客の訪問時間から見る

六義園は2月に訪れた観光客数が一番少なかった。1月、3月と4月の観光客数の差は大きくなかった。浜離宮恩賜庭園については、1月と2月の訪れた観光客数が少なく、3月から観光客数は多くなった。清澄庭園は2月の訪れた観光客数が一番少なかった。1月、3月と4月の観光客数の差は大きくなかった。向島百花園は3月に観光客数は多くなった。

6.2.5.3 各庭園対象地の観光客国籍から見る

中国人と台湾人は六義園に行くケースが一番多かった。一方、浜離宮恩賜庭園は基本的には欧米人、韓国人は清澄庭園に行くケースが一番多いという状況がまとめられた。

6.2.5.4 各庭園対象地の景観構成要素から見る

六義園、浜離宮恩賜庭園と清澄庭園の観光客数が多い対象エリアの景観構成要素(景観資源)は、湖や海を模した景観であり、共通点は水景観の存在であった。つまり、外国人観光客にとって日本庭園の水景観はもっとも重要な構成要素の一つだと考えられることが裏付けられた。

6.3 結果3：SNSの情報発信について

6.3.1 ツイッターによる日本人からのツイート内容

本項の調査では、ツイッターによる日本人からのツイート内容について、各庭園に関して何を発信しているのかを調べることにした。

ツイートが始まってから2018年11月4日までに行われた各対象庭園のツイートの内容をまとめた統計データから見ると、4つの対象庭園のフォロワー数量は五千人を超えない程度であった。一番多いのは六義園で4,317人であった。次は浜離宮恩賜庭園で2,087人であった。また、4つの対象庭園は基本的には日本語ツイートを主体にやっていることが明らかになった。英語ツイート数に関しては、一番多かったのは浜離宮恩賜庭園で、87本ツイートがあった。浜離宮恩賜庭園では、全部で319本ツイートがなされていたため、英語によるツイートは4分の1をやや超える27.2%を占めていたことになる。なお、英語と日本語を併記したツイートも33本あり、それを入れると全体の37.6%が英語情報を含むツイートであった。

一方、向島百花園と清澄庭園からの英語ツイートは、それぞれ5本ずつに留まっていて、一番少ない状況にあった。また、六義園のフォロワーは4,397人と一番多かったし、ツイート数も45本と多かったが、英語ツイートのみでのツイートは9.0%、英語を含むツイートでも12.7%に留まった。

6.3.2 中国のポータルウェイボー (sina weibo)

中国国内の本土に在住する中国人は、ツイッターを使用することができない。そのため、国内にはツイッターと類似のメディアとしてポータルウェイボー (sina weibo) が存在する。著者は中国語が母国語で得意であり、分析ができるため、本論文ではツイッターの分析をするのと同時に、中国人のウェイボーについても分析を行うことにした。

1) ポータルウェイボー (sina weibo) の概要紹介

中国ポータルウェイボー (sina weibo) は、中国を母国語とする人たちの間で、極めて大きい影響力を与えているアプリケーションである。おおよそ5億人の登録ユーザーを超える状況にあるとともに、300万を超える認証ユーザーを抱えている。認証ユーザーのうち53万以上は、オーソライズされた取組みなどを行っている企業や機関である¹⁹⁾。

2) 認証システムタイプ

ウェイボーを使うときには、多くのブロガーの名前の後ろに青いVシンボル、黄色Vシンボルまたは金色Vシンボルがついているをよく見かける。これらのシンボルの意味は、有名人の権益を保障するため、ウェイボーが有名人認証システムを作り出したことによる。シンボルの異なった色は違った身元を代表することを意味している。シンボルがつく認証有名人(団

日本庭園の景観に対する外国人観光客のデスティネーション選択性に関する研究(体)には、企業、政府、媒体(メディア)、機構団体、学校、公益などの公共事業と、個人的なブロガーが含まれている。

3) ウェイボーによる、各対象庭園の統計分析

ウェイボーは、現在中国人がオンライン上で交流する最も有力なツールの一つになっている。ウェイボーに掲載される色々な情報は、ユーザーは全て獲得・閲覧することができる。検索方法としては、「ウェイボー検索」という選択項目がある。この機能を中国人は各庭園に対するツイートの検索ツールとすることができる。

本調査では、「ウェイボー検索」で、各庭園の名前の現在の中国の漢字をキーワードに検索を行って、各庭園に関してツイートされた内容とユーザーを抽出した。

例えば、「六義園」の中国語は「六义园」、「浜離宮恩賜庭園」の中国語は「滨离宫恩赐庭园」、「清澄庭園」の中国語は「清澄庭园」、「向島百花園」の中国語は「向岛百花园」である。以上の文字をキーワードとして使用して「ウェイボー検索」を行った。なお、ウェイボーには「ホットウェイボー」と呼ばれる項目がある。「ホットウェイボー」のユーザーは全て著名なユーザー、ほとんどV付けのユーザーである。「ホットウェイボー」の中に、フォロワーが多い、認証していないユーザーがいる場合がある。「ホットウェイボー」は、ツイートに対するフォロワーが多いため、ウェイボー中に発表されるコンテンツの中でも、一定の地位と影響力を持つことができる。さらに言えば、民衆は「ホットウェイボー」が発信する言論を参考にし易い傾向がある。

本修士論文では、このホットウェイボーによって発信された内容が、中国人による都立庭園の利用状況に相関的な影響を与えるのかを総括した。参考としたデータは、2013年3月24日から2018年12月23日までの期間とした。

検索したホットウェイボーの中には、ユーザー数量とウェイボーの数量については、ともに六義園に関して発表したものが一番多いことが明らかとなった。六義園においては、44ユーザーが認証済みのユーザーで、8ユーザーが無認証であった。このことは影響力のあるユーザーが六義園において発信している傾向にあると解釈できた。総計では、六義園では、合計52ユーザーが91本ウェイボーを発表していた。

内容別に見た集計結果をみると、「推薦」、「紹介」、「イベント」、「撮影作品」と「感想」5つの方面から発信されている状況がまとめられた。そして、六義園については、54本のウェイボーが桜に関する内容であり、37本のウェイボーが紅葉に関する内容と、全体の約半分の内容は紹介に関する内容であることが明らかとなった。ちなみに、他の3つ庭園のウェイボー数量は10件以下とかなり少ないことが明らかとなった。今までの調査の中では、中国人をはじめとするアジア系の外国人観光客は、六義園を選好する傾向にあったが、このウェイボーに基づく分析も、その傾向を支持する結果を示していた。

7. 考察

結果で記したとおり、本修士論文では、インタビュー調査、ラインセンサス調査、SNS情報を分析する資料調査の3種類の調査を行った。それらの結果に基づき、

「日本庭園に対する情報発信と、外国人観光客の観光デスティネーションの選択性との間には関連性がある」

という操作仮説を念頭に、考察をまとめていきたい。

7.1 東京都公園協会へのインタビュー調査に対する考察

(公財)東京都公園協会の菊池氏と永田氏に面接形式のインタビュー調査を行い回答して頂いた。

庭園の魅力アップと江戸東京の庭園文化の魅力発信、海外利用者層の拡大と利用促進のため、東京都公園協会は5つの方策がある。具体的には、①多言語庭園パンフレットの配布；②ウェルカムチケットの配布；③ホームページ、ツイッターによる利用案内や花の見ごろ情報の提供；④ライブカメラによる映像配信（六義園）；⑤マスコミ、ホテル、旅行会社、鉄道会社等とのタイアップによる広報活動の展開である。

今外国人観光客のリーフレットの言語別の配布比率は、英語が3分の2、フランス語が10%、中国語が5%、ハングルが3%程度とのことである。この状況を見ると、東京都の文化財庭園に関心を持ち、リーフレットを受け取る外国人は、東アジア系よりも欧米系のほうが多いと考えられた。

そして、外国人を集客するためにはイベント等の開催も重要であるとは考えているが、庭園の趣旨に添わないような単なる人集めにはならないことが重要だと考えられた。つまり、文化財庭園の本質とマッチしたイベントを行い、その様なイベントで訪日外国人の集客を狙いたいと考えていることが明らかとなった。

ツイッターによる、今浜離宮恩賜庭園、清澄庭園、六義園については英語によるツイートがある。花の見ごろの時期など、時機を見て要所要所で英語のツイートを職員が行っている。しかし、高頻度のツイートの実施は難しい現状にある。インバウンド観光客の利便性向上の為には、これから中心として取り組むべきだと考えられる。概して、英語のツイートは日本語を話す職員には難しいという問題がある。

広報活動については、今まで、ホテル約100か所、駅の観光案内所に対して行っているとのことである。庭園の近隣駅については現場の庭園職員が対応し、主要ターミナル駅やバスタについては新宿の本社職員が対応している。職員の人数にも限りがあり、広範な実施は難しいと考えており、現在は置き場に関する詳細な統計は取っていない。

庭園多言語ガイドボランティアによる園内解説の充実のため、外国人向けボランティアガイドの実施(今回の3つ対象庭園、浜離宮恩賜庭園、六義園、清澄庭園は実施している)が必要である。または、子ども向け庭園ガイド、子ども向けイベントの実施もしている。

以上が東京都公園協会へのインタビュー調査の調査に関する考察のまとめとなるが、この部分の調査については、「日本庭園に対する情報発信と、外国人観光客の観光デスティネーションの選択性との間の関連性」の検証に関しては直接の成果を求めるものではなく、その事前調査と位置付けている。

7.2 外国人観光客群集を明らかにする調査方法

「六義園」、「浜離宮恩賜庭園」、「清澄庭園」、「向島百花園」の4か所の庭園に対して、2019年1月から4月の4か月間に毎月各1回、昼から午後にかけて1日3回のラインセンサスを行い、観光客の国籍・人数・行動を観察し、データを記録したものである。全ての庭園はボランティア案内士がいる。事前に申請して無料で使用できる。ここでは欧米人は風景を撮り、日本のお茶を楽しむことが多い、アジア人は人を撮るのが好きという事実を明らかにした。また、浜離宮恩賜庭園は西洋人による旅行団体がメインであり、清澄庭園は台湾及び韓国からの旅行団体がメインであったことを明らかにした。

そして、訪れた観光客数が一番多かったのは浜離宮恩賜庭園で、389人であった。次は、六義園で216人であった。一番少ないのは向島百花園で、19人であった。向島百花園は基本的には日本人が中心で、外国人はあまりいない状況である。六義園は2月に訪れた観光客数が一番少なかった。1月、3月と4月の観光客数の差は大きくなかった。浜離宮恩賜庭園については、1月と2月の訪れた観光客数が少なく、3月から観光客数は多くなった。清澄庭園は2月の訪れた観光客数が一番少なかった。1月、3月と4月の観光客数の差は大きくなかった。

操作仮説である「日本庭園に対する情報発信と、外国人観光客の観光デスティネーションの選択性との間の関連性」に着目して考察すると、中国人と台湾人は六義園に行くことが一番多いことが明らかとなった、一方で浜離宮恩賜庭園は基本的には欧米人、韓国人は清澄庭園に行く傾向が一番強いという状況が明らかとなった。つまり、出身国や地域によって、外国人観光客の観光デスティネーションの選択性は異なることを明らかにすることができた。

また、六義園、浜離宮恩賜庭園と清澄庭園の観光客数が多い対象エリアの景観構成要素(景観資源)は、湖や海を模した景観であり、共通点は水景観であるということが明らかとなった。このことから、外国人観光客にとって、出身国や地域に関わりなく、日本庭園の水景観は非常に重要な構成要素の一つであると考えられた。

7.3 SNS 情報発信の現状を明らかにする調査

日本でツイッターを開始された時から2018年11月4日まで、各対象庭園のツイートの内容のデータを分析し集計した。4つ対象庭園のフォロワーの数量は5,000人を超えない程度であることが明らかとなった。一番多かったのは六義園で、4,317人であった。次は浜離宮恩賜庭園で、2,087人であった。また、4つ対象庭園は基本的には日本語ツイートを中心に行っていて、英語ツイート数に関して、一番多いは浜離宮恩賜庭園で、87本ツイートがあり、全部で319本ツイートの中で27.2%に占めていた。向島百花園と清澄庭園については5本ずつ確認され、一番少ない状況であった。また、六義園のフォロワーやツイート数量が一番多いが、英語ツイートは12.7%で、浜離宮庭園よりも低い比率であった。

「外国人観光客の観光デスティネーションの選択性との間の関連性」という操作仮説に照らし合わせて、浜離宮恩賜庭園は基本的には欧米人の来訪者が多いという調査結果が出ているため、英語で発信されている庭園に西洋人が多いという傾向が確認できた。つまり両者の関係には結びつきがあると考えられた。

続いて、ウェイボーを用いた調査を行った。中国のポータルウェイボーは、広く中国人のオンライン上の交流ツールになっている、ウェイボー上の色々な情報は、メンバーは全て獲得・閲覧することができる。ウェイボーには「ウェイボー検索」という機能があり、これは中国人の観光行動に影響を与えるツールになる。「ウェイボー検索」で各対象庭園の名前の漢字をキーワードに検索に行ったところ、各庭園に関するツイート内容とユーザーとの関係性を抽出することができる。

本論文は、2013年3月24日から2018年12月23日までに検索されたホットウェイボーを分析した。その結果、六義園に関して発表したユーザー数量とウェイボーの数量が一番多いことが明らかとなった。そのうち44ユーザーが認証済みの発信者、8ユーザーが無認証、合計では52ユーザーが91本ウェイボーを発表した。つまり影響力のあるユーザーの発信が六義園では多く、中国人をはじめとするアジア人が六義園をデスティネーションとして選択しているという事実に整合していた。なお、内容的にみると、54本のウェイボーによる発信は桜に関する内容であり、37本ウェイボーは紅葉に関する内容であった。本論文で定量的に検証する機会はなかったが、これらの時期には多くの中国人が六義園に来訪することは経験的に知られている。なお、西洋人が多く来訪する浜離宮恩賜庭園も含め、他の3つ庭園のウェイボー発信数量は、10件を下回り、かなり少ないという事実も明らかとなった。また、中国人は六義園に行くことが一番多いという調査結果が出て、ポータルウェイボーに発表した内容と結びつきがあると考えられた。

8. 結論

上述した仮説では、外国人が抱く日本庭園観については、色々な要素があるという指摘を行っていた。本論文では、その様な指摘も考えに入れ、また調査対象が東京都の文化財庭園であることを考慮して、「東京都公園協会が、東京都立庭園として管理している方策と、外国人観光客による日本庭園に対する観光デスティネーションの選択性との間には関連性がある」という理論仮説を設定した。更に、具体性のある操作仮説としては、「日本庭園に対する情報発信と、外国人観光客の観光デスティネーションの選択性との間には関連性がある」と設定して、調査を進めることとした。

本論文では、考察で行った成果をもとに、インタビュー調査、ラインセンサス調査、SNS情報を分析する資料調査の3種類の調査を用いて、以下に述べる2つ事例を通して結論を取りまとめた。

事例1では浜離宮恩賜庭園を例にして説明したい。既に述べたとおり、インタビュー調査を通して、東京都立9庭園を管理している(公財)東京都公園協会の管理・方策を明らかにした。Webサイトや外国人向け広報媒体等を通して多言語での情報提供を推進するため、SNS情報発信という方策があり、日本ツイッターを通して多言語での利用案内や花の見ごろ情報を提供している。そして、上述のとおり各対象庭園に関する日本ツイッターの内容を調査した。そのうち、浜離宮恩賜庭園の英語ツイート数が一番多いという事実が明らかとなった。またラインセンサス調査という現地調査方法を実施して、浜離宮恩賜庭園は観光客数が一番多く、基本的

日本庭園の景観に対する外国人観光客のデスティネーション選択性に関する研究には欧米人が多いことも明らかとなった。このようなことを全体的に鑑みると、(公財) 東京都公園協会が、東京都立庭園として管理している方策と、外国人観光客による日本庭園に対する観光デスティネーションの選択性との間には関連性があり、サイクル状になっていることを検証できたと結論付けられる。

次に、事例 2 では六義園を例にして説明したい。中国の SNS 情報発信ウェイボウの統計によると、中国語のウェイボウでは、英語ツイッターと違い、六義園の情報発信の数が一番多いという事実がわかった。そして、ラインセンス調査という現地調査方法を実施して、中国人と台湾人は六義園に行く人が一番多いことを明らかにできた。つまり日本庭園に対する情報発信と、外国人観光客の観光デスティネーションの選択性との間にはトライアングル状の関連性があることも、事例的ではあるが検証できたと結論付ける。

また、すべての外国人に共通する事項も確認できた。例えば、日本庭園の景観においては、水景観はあらゆる国籍の人にとって重要な構成要素だと考えられた。

以上、本修士論文では、(公財) 東京都公園協会が東京都立庭園として管理している方策と、日本庭園に対する情報発信は、外国人の日本庭園に対する理解の仕方や日本庭園に対して抱いているイメージと関連している状況を、一定程度把握できたのではないかと考えられる。また、事例的ではあるが、現代における外国人による日本庭園景観についての選好性を明らかにし、観光デスティネーションとしての選択性を明らかにすることができた。

この様に本論文における調査を行うことで、日本庭園の景観に対する多様な主体の評価を深く理解することができるとともに、外国人観光客に対する庭園の観光資源としての有効な活用の方策に資する知見を得ることができたのではないかと判断している。

注

- 1) 日本政府観光局 (JNTO) : 訪日外客数 (年表) 資料
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/since2003_visitor_arrivals.pdf
(2019 年 7 月 5 日最終確認)
- 2) 第 2 回 (平成 28 年 3 月 30 日) 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議 (2018) 第 2 回 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議 議事要旨
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/dai2/gijiyousi.pdf
(2019 年 7 月 5 日最終確認)
- 3) JNTO (2016) JNTO 訪日旅行ハンドブック 2016, JNTO
http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/jnto_databook_2016.pdf
(2019 年 7 月 5 日最終確認)
- 4) 田中昭三 (著)・サライ編集部 (編)・斎藤忠一 (監修) (2002) 「日本庭園」の見方, 小学館, 159pp
- 5) 環境アセスメント用語集:
<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3487631/www.env.go.jp/policy/assess/1-4term/k.html>
(2019 年 7 月 5 日最終確認)
- 6) 庭園ガイド:

李佳恵

<https://garden-guide.jp/style.php?s=pond>

(2019年7月5日最終確認)

- 7) 文化庁ホームページ <http://www.bunka.go.jp>
- 8) 鈴木誠・田崎和裕・進士五十八 (1989) 外国人の日本庭園観に関する比較研究, 造園雑誌 52(5), 25-30
- 9) 鈴木誠 (1998) 欧米人の日本庭園観, 造園雑誌 (ランドスケープ研究) 62(2), 136-143
- 10) 杉本興 運 (2012) 日本における観光資源分布状況からみた地域の特徴:計量分析のアプローチから、日本地理学会発表要旨集 2012a オンライン
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2012a/0/2012a_100034/_article/-char/ja/
- 11) 谷口綾子・今井唯・原文宏・石田東生 (2012) 観光地における多様な主体の地域愛着の規定因に関する研究:ーニセコ・倶知安地域を事例として, 土木学会論文集 D3, 土木計画学 68(5), I_551-562
- 12) 井原縁 (2017) 近代の文化財保護制度と庭園の観光利用:「名勝」庭園と「観光資源」, 奈良県立大学研究 (2017) 季報 27(3), 143-169
- 13) 梅本美奈子 (2018) 金沢における文化財を活用した都市観光と人材育成 (特集 東京の文化財庭園:魅力と価値の発信) 都市公園 = Public parks (221), 図巻頭 1p, 40-43, 2018-07
- 14) 小野健吉 (2017) 東京都所管文化財庭園の観光を含めた活用の展望, 観光学 (16), 25-38
- 15) 小野良平 (2018) 東京の文化財庭園と観光(特集 東京の文化財庭園:魅力と価値の発信) 都市公園 = Public parks (221), 図巻頭 1p, 9-11, 2018-07
- 16) 山口亜希子 (2014) 観光資源としての都市オープンスペースに関する考察:訪日外国人旅行者向けの情報発信の実態について, 公園管理運営研究所報告 8, 53-65
- 17) 三ツ木丈浩 (2018) 旅行・観光競争力についての一考察, 埼玉女子短期大学研究紀要 37, 47-62
- 18) 森重昌之 (2012) 観光資源の分類の意義と資源化プロセスのマネジメントの重要性, 阪南論集 人文・自然科学編(前田弘教授追悼) 47(2), 113-124
- 19) (財) 自治体国際化協会 北京事務所 (2013) 中国におけるインターネット発展と自治体情報発信の展望, Clair Report No.383 (Mar 15, 2013)

東海大学観光学研究

No.5 2019

2020年 3月25日 発行

発行者 立原 繁

東海大学大学院文学研究科観光学専攻
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1
tel 0463-58-1211 (代)

発行所 東海大学出版部

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1
tel 0463-58-7811
